和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第17集

木ノ本Ⅲ遺跡　第９次発掘調査概報

１９９８

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

出土和鏡「洲浜花枝双鳥文鏡」（実寸大）

序　文

木ノ本Ⅲ遺跡の発掘調査も今回で９回目になりました。こうした調査の積み重ねで、少しづつこの遺跡の性格も明かになってきています。

特にこのたびの調査は、木ノ本地区の道路拡幅工事にともなう事前の発掘調査で、様々な成果を得ることができました。

その成果のひとつに、和鏡の出土があげられます。詳しくは本文で報告していますが、この和鏡は鎌倉時代のもので、完全な形で出土したということは貴重な発見といえます。

また、今回の調査地はかつて金製の勾玉が出土したことでよく知られている車駕之古址古墳の隣接地です。今回の調査では、この車駕之古址古墳の外堤の広がりを推定できるような施設もみつかりました。

今回、これら発掘調査の貴重な成果を収めた本書を刊行いたします。本書が広く市民の方々にもご利用いただきまして、郷土史の解明に役立つものとなれば、私どもにとって望外の喜びに存じます。

最後になりますが、今回の発掘調査を行うにあたり、御指導・御協力を賜わりました関係各位には深く感謝申し上げますとともに、今後いっそうの御協力をお願い申し上げる次第です。

平成10年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団
理事長　木下　正昭

例　言

1．本書は、和歌山市木ノ本750番地先において和歌山市が計画した市道拡幅工事に伴う木ノ本Ⅲ遺跡第９次発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、和歌山市の委託事業として、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、調査対象面積約60㎡を1997年10月31日から約１ヶ月の期間で実施した。

3．発掘調査および報告書刊行に係わる事務局は、以下のとおりである。

和歌山市教育委員会

教育長	坂口全彦
文化振興課長	志岐忠一
文化財班長	小松堉甫
学芸員	益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	木下正昭
事務局長	竹尻圭吾
総務課長	別院　稔
事務員	奥野勝啓（調査庶務担当）
学芸員	木建正宏（発掘調査担当）

4．遺跡・遺構の航空撮影は株式会社マエダに委託して実施した。それ以外の遺跡・遺構および本書掲載の遺物写真撮影は木建が行った。

5．本書の執筆は、調査担当者の木建のほか同財団学芸員北野隆亮・高橋方紀が分担し、編集は木建が行った。各執筆分担の文責は目次に示した。

6．写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

7．出土和鏡のＸ線撮影および成分分析については、財団法人元興寺文化財研究所に委託し、山田哲也氏から分析結果についての報告をいただいた。また、和鏡の文様等について大阪市立博物館・前田洋子氏に有益な御教示をいただいた。記して感謝申しあげます。

8．概要報告書の作成にあたり、多くの方々に現地及び遺物整理作業時に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1．調査の契機と経過……（木建正宏）……1

2．位置と環境……（木建）……2

3．木ノ本Ⅲ遺跡の主な既往の調査……（〃）……4

4．調査の方法と経過

（1）調査の方法……（〃）……6

（2）基本層序……（〃）……6

5．遺構……（〃）……8

6．遺物

（1）古墳時代の遺物……（高橋方紀）……12

（2）平安・鎌倉時代の遺物……（北野隆亮）……14

7．出土和鏡の科学的分析……（山田哲也）……16

8．まとめ……（木建）……18

報告書抄録……20

図版目次

図版1　調査地および車駕之古址古墳（南から）

図版2　調査地遠景（南から）、調査前状況（南から）

図版3　調査地北端部土層堆積状況（西から）、調査地南端部土層堆積状況（西から）

図版4　第1遺構面完掘状況（北から）、第1遺構面完掘状況（南から）

図版5　SK－2完掘状況（西から）、SK－2完掘状況（南から）

図版6　SK－2土師器皿および和鏡出土状況（南から）、SK－2土層堆積状況（西から）

図版7　P－31瓦器皿出土状況（西から）、P－34瓦器椀出土状況（西から）

図版8　第2遺構面完掘状況（右が北）、SD－2（西から）

図版9　SD－2内葺石検出状況（東から）、SD－2内埴輪検出状況（東から）

図版10　円筒埴輪（口縁部）、円筒埴輪 朝顔形埴輪

図版11　土師器 瓦器、SK－2出土土師器皿

図版12　SK－2出土和鏡（洲浜花枝双鳥文鏡）、和鏡X線写真

1．調査の契機と経過

木ノ本Ⅲ遺跡は、これまでの８回にわたる調査成果によって、中世の井戸、近世の土坑等が確認されているほか、第７次調査で石垣とそれに伴う炭・焼土や梵字を瓦当面に配した中世の軒丸瓦等が出土したことによって中世寺院の存在が推定されている。

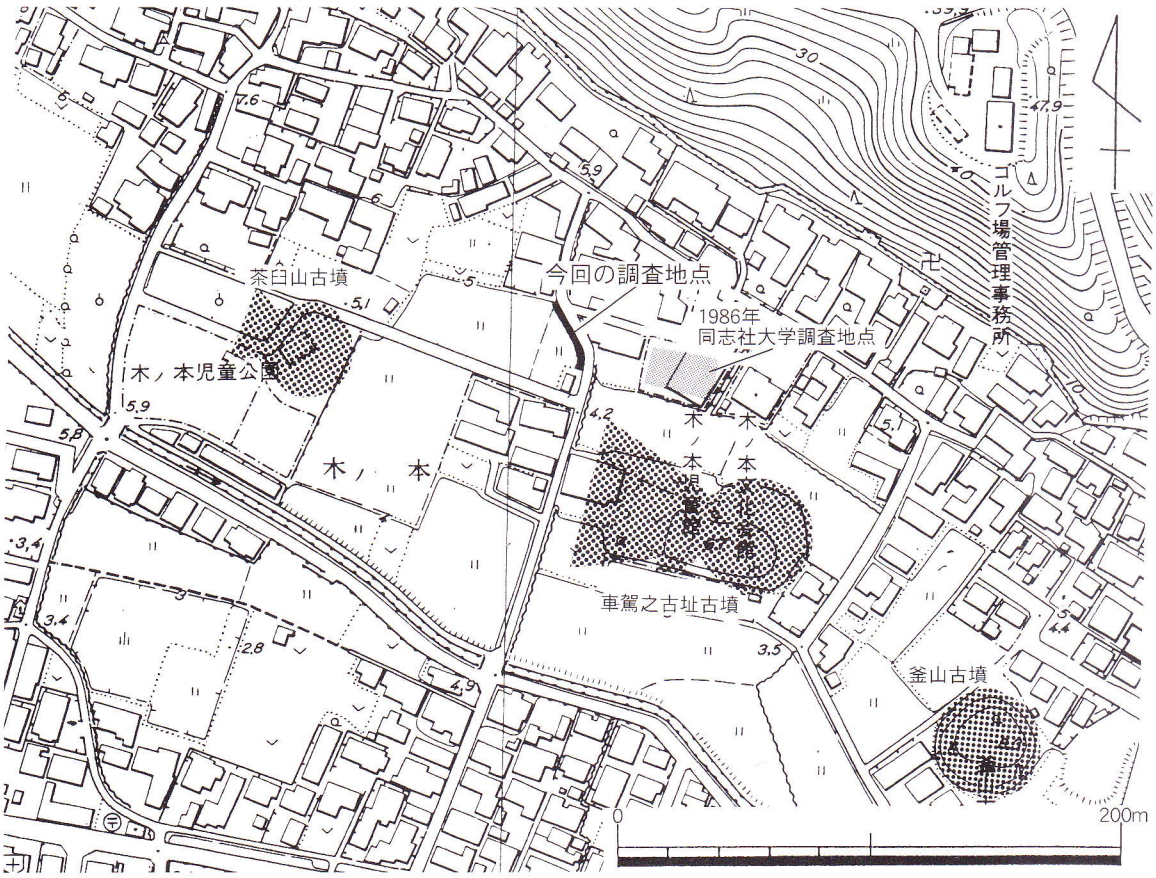
またこの遺跡の範囲内には茶臼山、車駕之古址および釜山の３古墳が存在し、木ノ本古墳群を形成している。

これらの古墳に関連した遺物として、現在までの調査による出土遺物には円筒埴輪や朝顔形埴輪・蓋形埴輪なども見られる。

今回の第９次発掘調査事業は、和歌山市によって和歌山市木ノ本750番地先に計画された市道拡幅工事が、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された木ノ本Ⅲ遺跡（遺跡番号42）の範囲内に相当することから、この工事に先立つ発掘調査を財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、和歌山市教育委員会の指導のもとに実施した。

調査対象地は、標高約５ｍを測り、木ノ本Ⅲ遺跡範囲内の中心部よりはやや西寄りにあたる。また、この調査地は茶臼山古墳第２次調査地の北東約80ｍ、車駕之古址古墳の前方部端からは北西に約40ｍの地点に位置する（第１図、図版１・２・３）。

調査面積は約60㎡で、現地における調査は、平成9年10月31日から同年12月2日の期間で行なった。



第１図　調査位置図

2．位置と環境

奈良県の大台ヶ原に源を発し、紀伊半島北部を西流して紀淡海峡にそそぐ紀ノ川は、その河口部に広大な沖積平野を形成する。和歌山市は、この沖積平野である和歌山平野を主な市域とする。

木ノ本Ⅲ遺跡は、この和歌山平野の西端近く、紀ノ川の北岸地域で和泉山脈の山麓部に展開する平地に存在し、古墳時代および中世を主な時代とする遺跡である（第２図）。

和泉山脈は、白亜紀に形成された地塁状の山地で、その組成は主に砂岩及び泥岩からなる。本遺跡は、この和泉山脈の南麓部に接する標高約５ｍの平地に立地する。

この遺跡の範囲内には釜山・車駕之古址・茶臼山の３古墳（釜山古墳群）が存在し、また中世には和鏡と須恵質および瓦質の壺が採集されている木ノ本経塚が形成される。

周辺地域の主な遺跡を見ると、西庄遺跡および鳴滝遺跡では旧石器時代のナイフ形石器の出土が知られている。このほかに紀ノ川北岸地域においては旧石器時代の遺跡は知られていない。

縄文時代になると、大谷川遺跡・木ノ本Ⅱ遺跡・六十谷遺跡などが知られている。このうち大谷川遺跡からは後期後半の土器が出土し、また木ノ本Ⅱ遺跡からは晩期後半の突帯文土器が出土している。

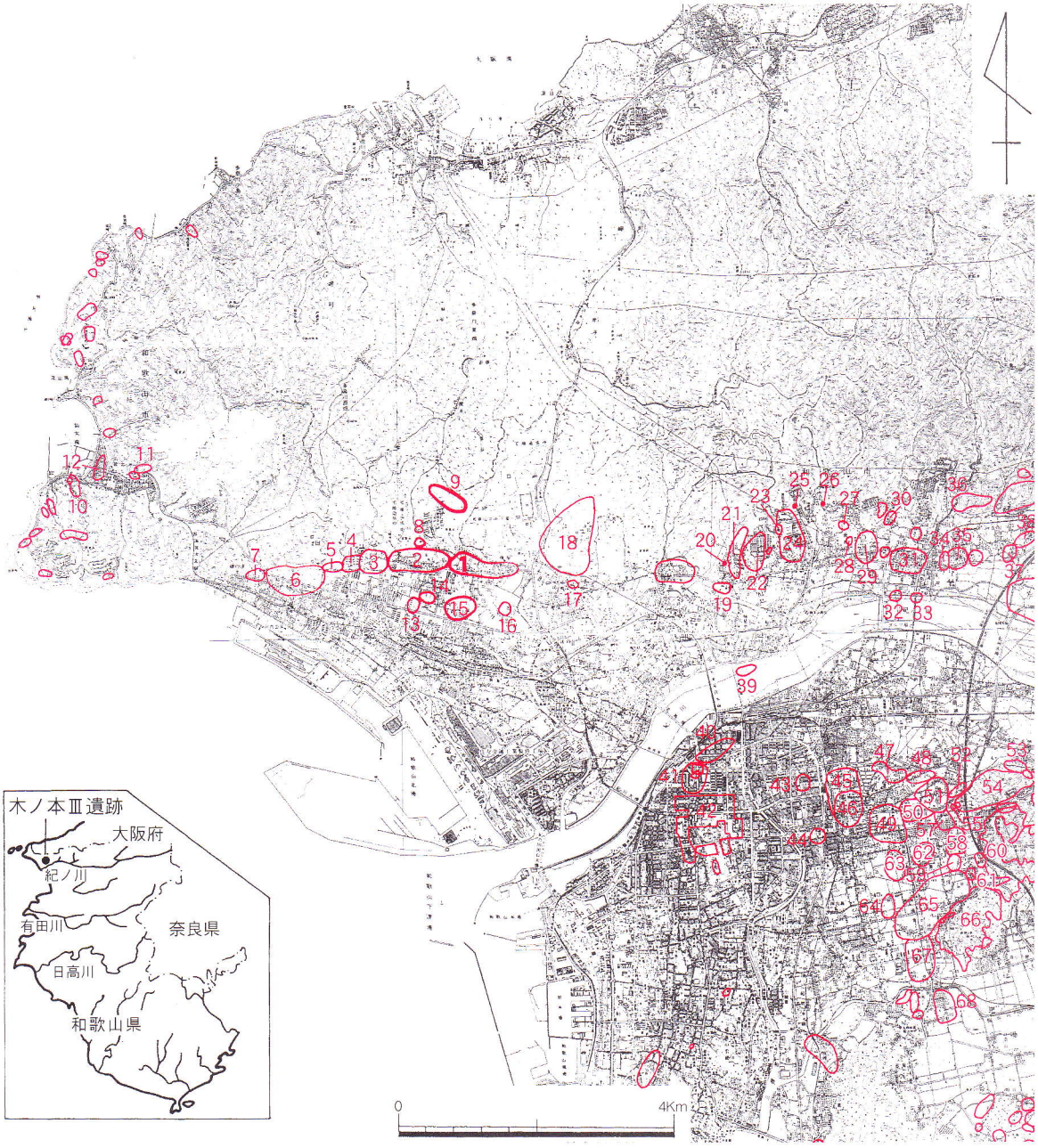
弥生時代では、紀ノ川北岸に橘谷・府中Ⅳ・楠見・木ノ本Ⅰ遺跡などが存在する。このうち橘谷遺跡は、標高100ｍ前後の丘陵上に展開する高地性集落であり、竪穴住居跡などが検出されている。また楠見遺跡からは、前期の土器の出土が知られ、さらに木ノ本Ⅰ・府中Ⅳ遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代になると、紀ノ川北岸には晒山古墳群・雨が谷古墳群・鳴滝古墳群・木ノ本古墳群などの中期から後期の古墳群が集中的に形成される。このうち晒山古墳群内には、馬冑・馬甲の出土で有名な大谷古墳が存在し、また木ノ本古墳群内では、調査地の南東約40ｍの地点に、金製勾玉の出土で知られる車駕之古址古墳が存在する。

その他に鳴滝遺跡では、古墳時代中期に大型の掘立柱建物倉庫群が営まれ、また府中Ⅳ遺跡や吉田遺跡などには集落が営まれ、さらに生産遺跡としては弥生時代後期から土器製塩が西ノ庄Ⅱ遺跡において行なわれるが、この製塩は古墳時代中期にピークを迎える。

一方紀ノ川南岸部においても、４世紀末から７世紀中頃にかけて、総数約700基の古墳からなる岩橋千塚古墳群が形成される。

歴史時代になると、奈良時代には紀ノ川北岸に上野廃寺・直川廃寺などの氏族勢力を基盤とした古代寺院が営まれる。また平安時代には加太廃寺、中世には木ノ本廃寺の存在も推定されている。その他に木ノ本には木ノ本経塚も営まれ、これらの遺跡から、古代・中世における仏教信仰の一端を窺うことができる。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	**木ノ本Ⅲ遺跡**	**古墳・中世**	18	高芝遺跡		35	直川廃寺跡	奈良～平安	52	音浦遺跡	古墳
2	木ノ本Ⅱ遺跡		19	楠見遺跡	先土器・古墳	36	北山古墳群	古墳	53	栗栖Ⅰ遺跡	古墳
3	木ノ本Ⅰ遺跡		20	大谷古墳	古墳	37	鳥井遺跡	古墳	54	花山古墳群	古墳
4	西庄Ⅱ遺跡		21	晒山古墳群	古墳	38	府中Ⅳ遺跡	弥生～古墳	55	鳴神貝塚	縄文～弥生
5	平の下遺跡		22	雨が谷古墳群	古墳	39	国有本遺跡	弥生～古墳	56	岩橋千塚古墳群	古墳
6	西庄遺跡	古墳～平安	23	鳴滝遺跡	古墳	40	山吹丁遺跡	弥生～古墳	57	鳴神Ⅲ遺跡	
7	磯脇遺跡	中世	24	鳴滝古墳群	古墳	41	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸	58	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安
8	城山遺跡	安土・桃山	25	奥出古墳	古墳	42	和歌山城跡	江戸	59	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
9	木ノ本Ⅳ遺跡	縄文・中世	26	園部円山古墳	古墳	43	友田町遺跡	弥生～平安	60	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良
10	加太南遺跡	古墳	27	園部Ⅰ遺跡		44	木広町遺跡	弥生	61	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳
11	加太駅北方遺跡	弥生～奈良	28	園部Ⅱ遺跡		45	太田・黒田遺跡	弥生～奈良	62	津秦Ⅱ遺跡	古墳～奈良
12	加太遺跡	縄文～中世	29	有功遺跡		46	太田城跡	安土・桃山	63	津秦遺跡	弥生
13	木ノ本小学校Ⅰ遺跡	古墳	30	大同寺遺跡		47	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	64	神前Ⅱ遺跡	古墳～室町
14	木ノ本小学校Ⅱ遺跡	古墳	31	六十谷遺跡	縄文～弥生	48	鳴神Ⅵ遺跡	古墳	65	井辺遺跡	弥生
15	榎原遺跡	古墳	32	和田遺跡	弥生～古墳	49	秋月遺跡	弥生～奈良	66	井辺前山古墳群	古墳
16	中野遺跡	古墳・中世	33	川口遺跡	弥生～古墳	50	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	67	神前遺跡	弥生
17	栄谷貝塚		34	直川遺跡	縄文	51	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	68	和田遺跡	弥生

第２図　木ノ本Ⅲ遺跡周辺の遺跡分布図

3．木ノ本Ⅲ遺跡の主な既往の調査

木ノ本Ⅲ遺跡においては、過去８回の調査が実施されており（第３図）、今回の調査は第９次調査にあたる。

過去の調査のうち、1986年に同志社大学によって実施された第１次調査、1992年度に本財団によって行なった車駕之古址古墳第４次調査および1993年度の本財団による調査の成果は、今回の第９次調査成果と非常に密接な関連がある。以下木ノ本Ⅲ遺跡および車駕之古址古墳の調査のうち、今回の第９次調査と関連の深い調査成果が得られたものを簡単に述べる。

ー第１次調査ー

1986年に実施された調査で、現在の木ノ本児童会館建設に伴う調査である。この調査は、同志社大学によって実施された。この調査では、幅4～5m、深さ35～50cmの東西方向を主軸とする「大溝」が検出された。この大溝の方向は、車駕之古址古墳の主軸に平行し、溝の南側斜面に直径10～20cmの砂岩の円礫が葺石状に施されている状況が確認されている。またこの溝の覆土内には車駕之古址古墳に関連すると思われる埴輪が多数包含されることなどから、この「大溝」が、車駕之古址古墳の外堤の外側を区画する「外周溝」である可能性が指摘された。

ー第３次調査ー

1988年に住宅建設に伴って、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が実施した調査で、約600㎡の面積を調査対象とした。この調査では、中世のものと考えられる井戸１基および集石遺構が10基、また近世の遺構では、南北方向に延びる杭列や数条の溝のほかにピット群も検出している。

ー第７次調査ー

1990年に、擁壁工事に伴って財団法人和歌山市文化体育振興事業団が実施した調査で、74㎡を対象面積として実施した。

この調査では、中世の石垣、溝、礎石などを検出した。また遺物としても、瓦質の羽釜、備前焼の甕・すり鉢、青磁の碗・皿のほかに、瓦当面に梵字をあしらった軒丸瓦なども出土しており、中世寺院の存在が想定されている。

ー車駕之古址古墳第４次調査ー

和歌山市の国庫補助事業として、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受諾して実施した調査である。この調査は、車駕之古址古墳の規模と外堤等の構造を確認するために、1～8トレンチまでの合計８ケ所にトレンチを設定して行った。

このうち最も北側に設定した４トレンチでは、先の1986年の調査で確認された「大溝」と同様の溝（SD－1）が東約50mの地点で確認でき、この溝がさらに東側へ延びることが確認された。

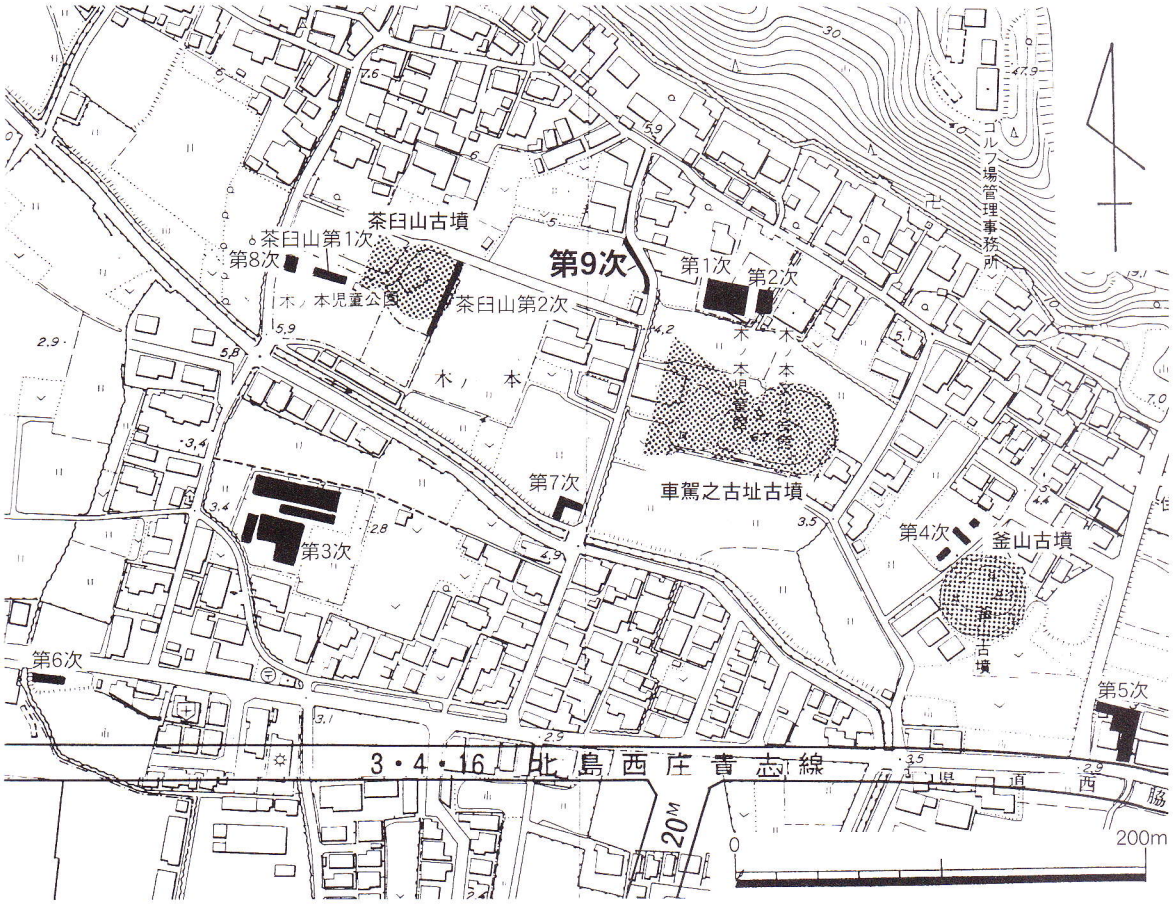
ー車駕之古址古墳第５次調査ー

1992年度の第４次調査に引き続き、和歌山市の国庫補助事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受諾して実施した調査である。

この調査は、先の車駕之古址古墳第4次調査に引き続いておこなった車駕之古址古墳の範囲確認調査である。

この調査では、9～14まで６ケ所にトレンチを設けたが、調査により車駕之古址古墳の前方部裾部や外堤裾部が検出され、前方部の様相が明らかとなった。

【参考文献】
『木ノ本釜山（木ノ本Ⅲ）遺跡発掘調査報告書』同志社大学考古学研究室・和歌山市教育委員会　1989年
『木ノ本Ⅲ遺跡第７次発掘調査報告書』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1990年
『木ノ本Ⅲ遺跡第３次発掘調査報告書』和歌山市教育委員会　1992年
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報１』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1992年
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報２』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1994年
『車駕之古址古墳範囲確認調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1994年



第３図　既往の調査位置図

4．調査の方法と経過

(1) 調査の方法

今回の調査は、和歌山市木ノ本750番地先において、和歌山市が計画した市道拡幅工事に伴う事前調査である。従って調査区も市道の拡幅部分にのみ限定され、その幅は1.6m、長さ37.5mの南北に細長いものとなった。

掘削に関しては、後述の基本層序１・２層、すなわち近・現代の堆積層を重機（バックホー）によって掘削し、以下の遺物包含層を人力によって掘削した。

堆積層および遺構の覆土の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を用いた。

実測などの記録については、任意の仮原点（0．0）を調査区の北東部に設け、調査区に沿って4mの区画を１区画として合計1から7の区画に地区割りを行ない（第４図）、この地区割りの基準ラインを用いて基本的に20分の１の縮尺を原則として実測を行なった。ただし、遺構内からの遺物出土状況や葺石などの実測図には10分の１の縮尺を用いて実測したものもある。また遺物包含層掘削時における出土遺物の取り上げに関しても上記の地区割りを用いた。

(2) 基本層序（第５図、図版３）

今回の調査区は、南北に長いため、調査区の北端部および南端部の土層堆積状況を観察し、これを今回の調査における基本的な堆積層序と定めた。堆積の土色・土質は以下のとおりである。

第1層　7.5Y5/1（灰）細砂

第2層　7.5Y6/2（灰オリーブ）細砂混シルト

第3層　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂

第4層　2.5Y5/2（黄褐）粗砂

第5層　10YR3/3（暗褐）粗砂

このうち第１層は現代の耕土であり、第２層はガラスやビニールなどを含む近・現代の整地層である。第３層は土師器や瓦器片などを含む鎌倉時代の遺物包含層で、第４層は、調査区の南部にて検出した車駕之古址古墳の外堤の盛り土に起因する堆積土である。この第４層には埴輪片などが含まれる。第５層は、水分を多く含む無遺物層である。

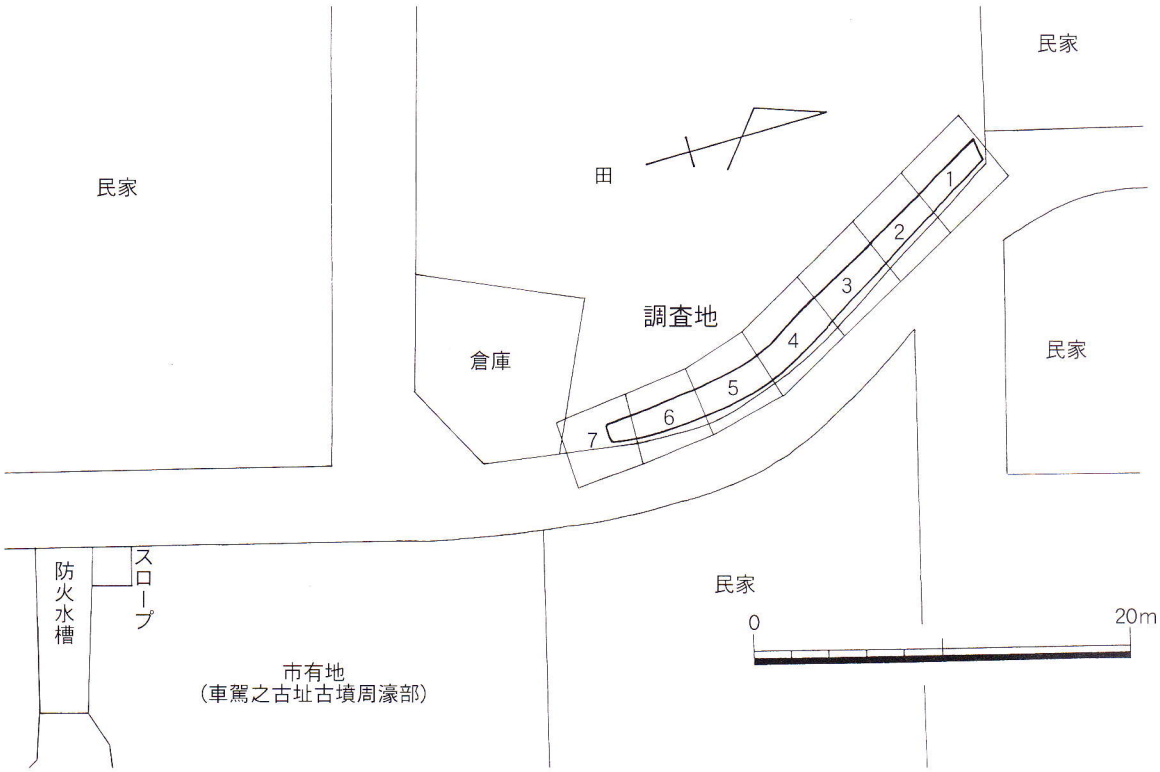
遺構面は、中世の遺構面が第３層の上面で、この遺構面は調査区全域にわたって存在している。この遺構面では溝、土坑、ピット群を検出した。また、古墳時代の遺構面は第４層の上面で、これは調査区中央部より南側で確認した。この遺構面では古墳時代に起源をもち、中世までなんらかの形で存在していた可能性のある溝（SD－2）を検出した。

これらの堆積層を見ると、平成7年度に和歌山市の国庫補助事業として、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託して実施した茶臼山古墳第２次調査時に確認されている第11層（黒色粘土層）と同様の堆積層は、今回の調査では確認できなかった。

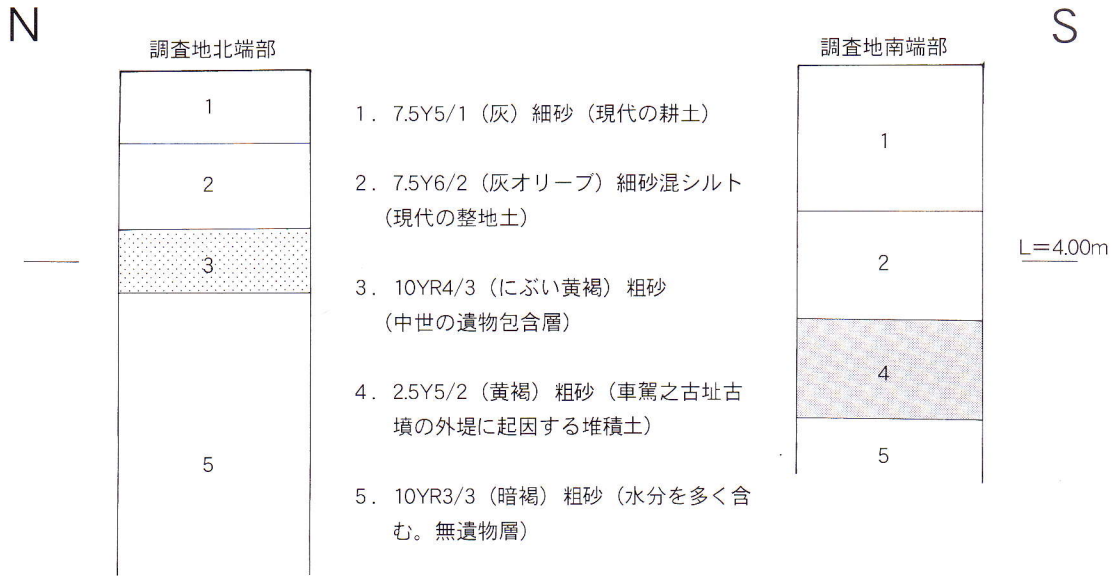
この黒色粘土層は、茶臼山古墳の調査時においては1から4の全てのトレンチ内で確認されており、周濠によって途切れていることが確認されている。従ってこの黒色粘土層は、古墳の墳丘内部のみ

に堆積していると考えられている。今回の調査においてはこの黒色粘土層を確認できなかったことから、やはり茶臼山古墳構築時に、墳丘内部のみに、人為的な作用によって堆積した層であるということができるであろう。

【参考文献】
『和歌山市内遺跡発掘調査概報ー平成７年度ー茶臼山古墳第２次調査』　和歌山市教育委員会　1996年



第４図　調査地周辺および地区割図



第５図　基本層序柱状模式図

5．遺構

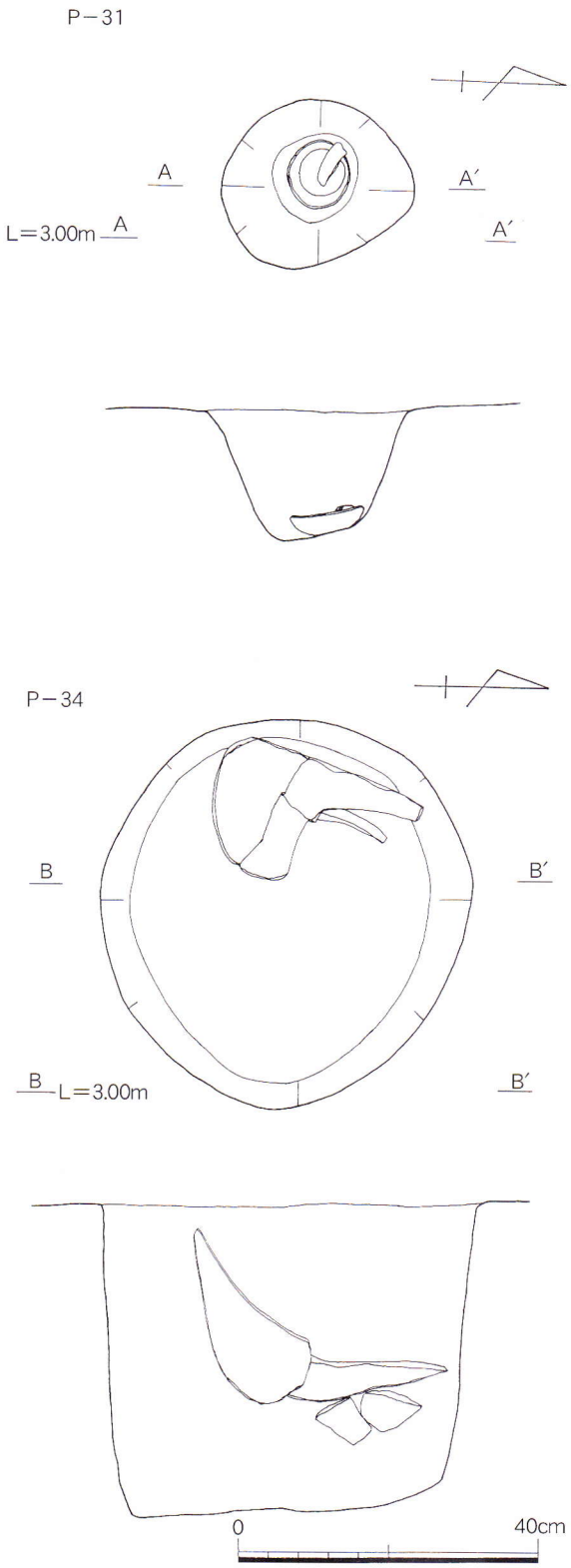
今回の第９次調査では２面の遺構面を確認した。第1遺構面には中世および近世の遺構群が存在し、第２遺構面では古墳時代の遺構を検出した。それぞれの遺構面で検出した遺構は、第１遺構面においてピットおよび土壙墓で、第２遺構面においては溝である。以下各遺構面別に記述する。

第１遺構面（鎌倉時代から江戸時代の生活面）

この遺構面は、現地表面から約60cm測る。遺構面を形成している堆積層は、基本層序の第５層に相当する。検出した遺構は、溝１条（SD－1）、土坑２基（SK－1・2）およびピット43基（P－1～43）である（第５図、図版４）。

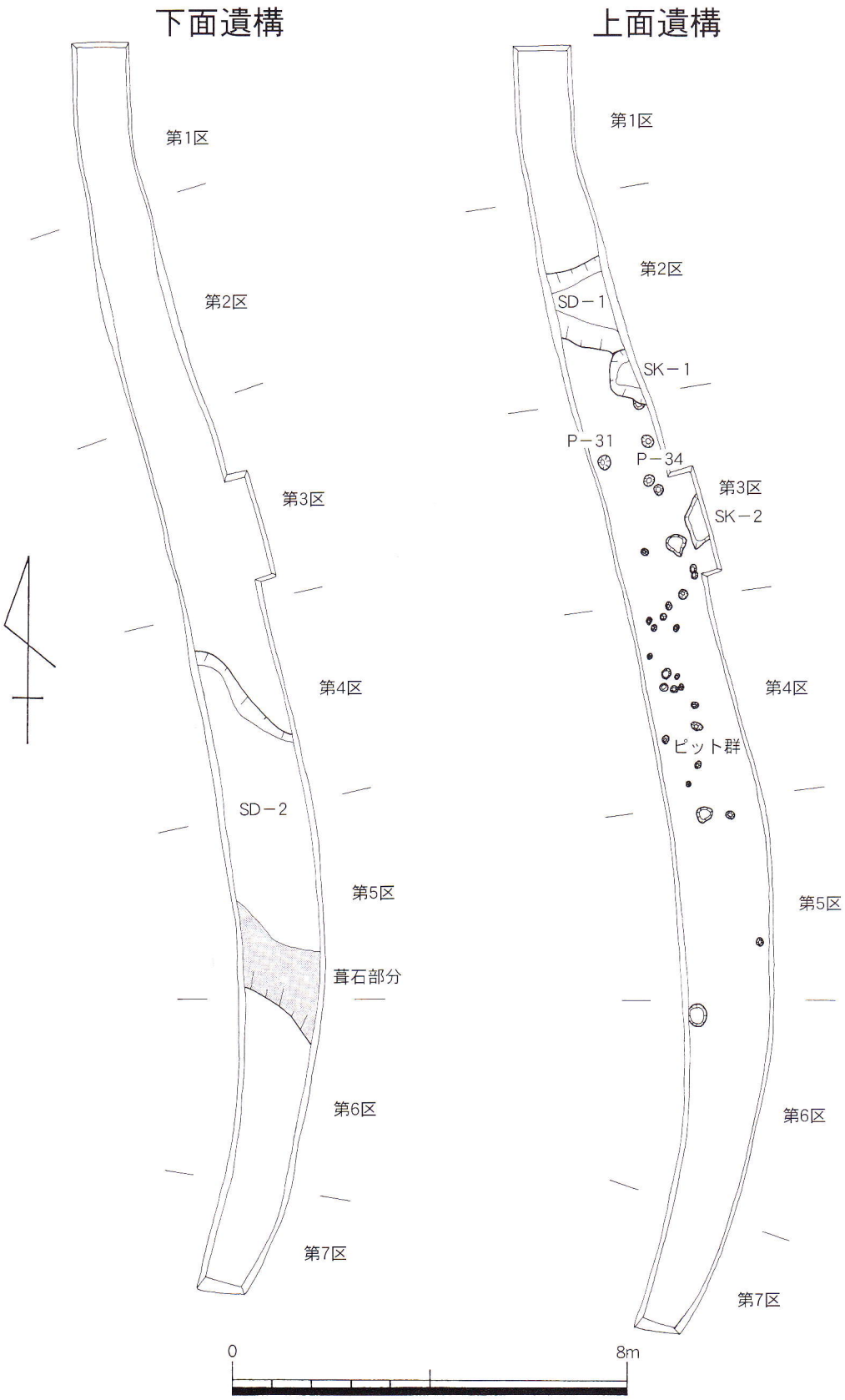
溝（SD－1）は、調査区の中央やや北よりで検出した、東西方向の溝である。調査区を東西に横切るためにその長さは不明である。幅は、1.5mを測る。この溝はSK－1およびピット1と重複関係にあり、この溝のほうが古い。覆土は暗い灰黄色を呈する細砂（2.5Y4/2(暗灰黄)細砂）で、炭を若干含んでいる。出土遺物の様相は、SK－1と同じで、土師器皿、瓦器椀のほかに埴輪片も出土している。よって、この溝とSK－1との間には、大きな時期差はないと考えられる。

次に２基の土坑であるが、まずSK－1は、SD－1と同じく調査区の中央やや北よりで検出した。この土坑はSD－1と重複関係にあり、この土坑のほうが新しい。規模は、調査区内の西側でごく一部を検出したにとどまり、その大半は調査区の東側に存在するため不明である。覆土は、黒褐色を呈する細砂（10YR3/1(黒褐)細砂）で、炭を多く含む。この土坑内からは、土師器皿、瓦器椀のほかに埴輪片も出土している。



第６図　P－31・34実測図

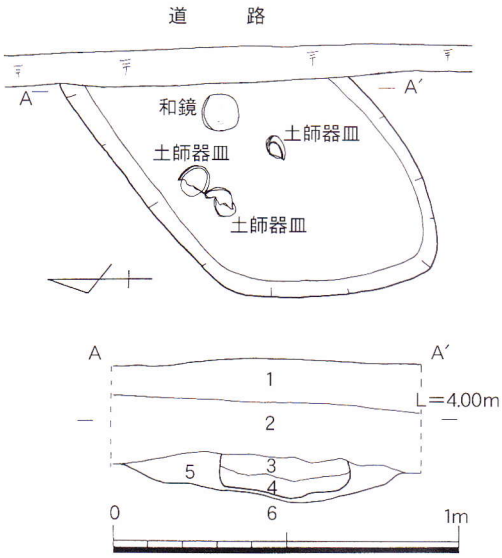
またSK－2は、調査区の中央部で検出した。東側は調査区外に存在する（第６図、図版５・６）。調査区内で検出した規模は、東西80cm以上、南北90cmの方形を呈し、深さは5～15cmを測る。覆土


下面遺構
上面遺構
第1区
第2区
第3区
第4区
SD－2
第5区
葺石部分
第6区
第7区
第1区
第2区
SD－1
SK－1
P－31
P－34
第3区
SK－2
第4区
ピット群
第5区
第6区
第7区
0
8m

第７図　遺構全体平面図

は２層に分層できる。上層の第１層は、黒褐色のシルトの混じる細砂（2.5Y3/1(黒褐)シルト混細砂）で、炭を若干含んでおり、また下層の第２層は、暗い灰味がかった黄色のシルトが混じる細砂（2.5Y 4/2(暗灰黄)シルト混細砂）である。この土坑からは土師器皿６点の他に和鏡（洲浜花枝双鳥文鏡）１点も出土した。

ピットは、調査区の中央部に集中する形で検出でき、その規模は直径10～40cmで、深さは5～35cmを測る。これらピットの覆土はほぼ共通しており、灰色を呈する細砂（5Y5/1(灰)細砂）である。これらピット群からの出土遺物はほとんど無いが、そのうちP－31・34からはそれぞれ瓦器皿および瓦器椀が出土した（第７・８図、図版７）。ただしP－4は近世のピットと考えられ、近世の染め付けの小片が１点出土した。

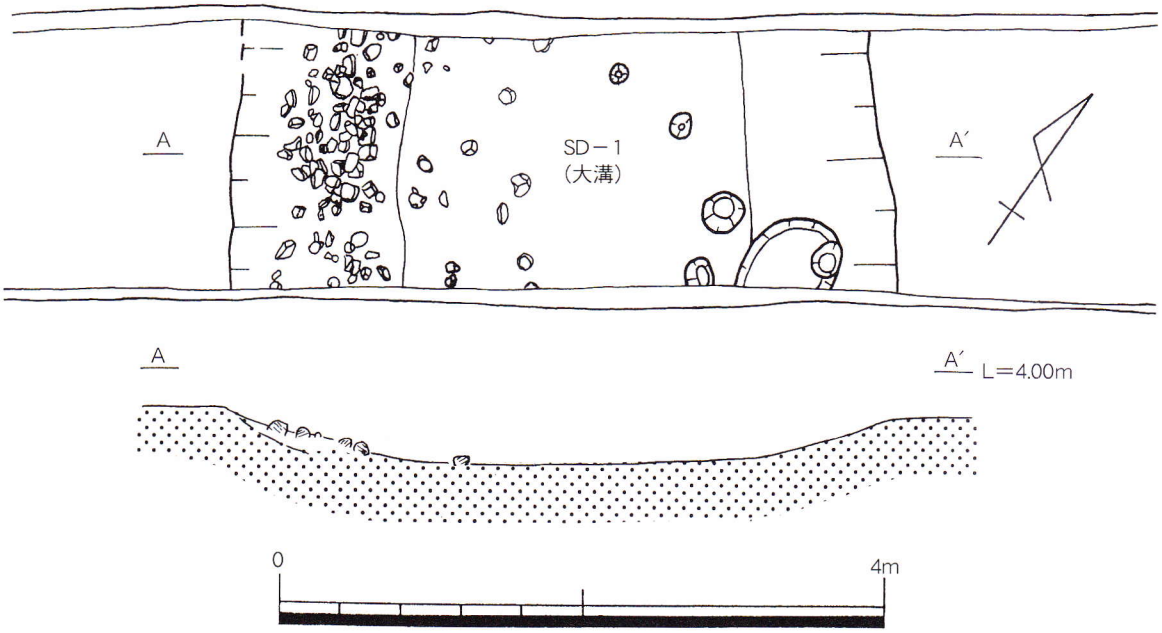


1．7.5Y5/1（灰）細砂（現代の耕土）
　基本層序の第1層に対応
2．7.5Y6/2（灰オリーブ）細砂混シルト（現代の整地土）
　基本層序の第2層に対応
3．2.5Y3/1（黒褐）シルト混細砂（炭を少し含む）SK－2第1層
4．2.5Y4/2（暗灰褐）シルト混細砂（炭を多く含む）SK－2第2層
5．10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂　SK－2第3層
6．10YR3/2（黒褐）粗砂　無遺物層

第８図　SK－２遺構実測図

第２遺構面（古墳時代の生活面）

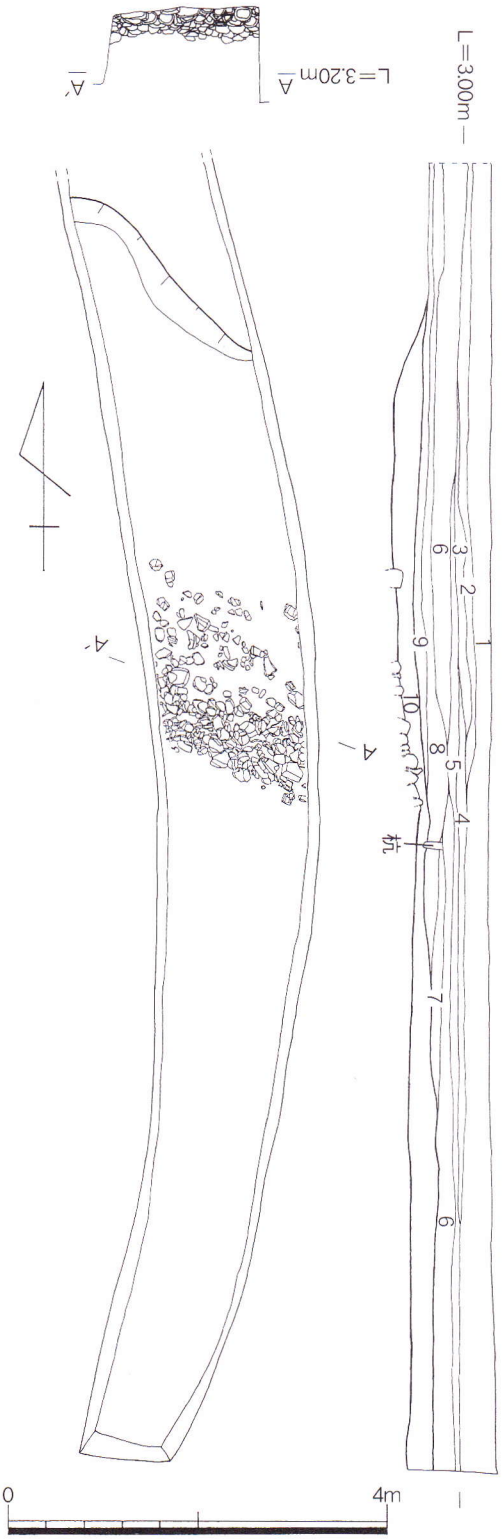
この遺構面は、調査区の中央部やや南寄りで確認した。遺構面を形成している堆積層は、基本層序の第６層に相当し、またこの遺構面を覆っている堆積層は第１遺構面の基盤となっている第５層である。検出した遺構は、古墳時代にまで遡る可能性のある溝１条（SD－2）である（第５図、図版



第９図　車駕之古址古墳第４次調査４トレンチSD－１実測図（既刊の概報から引用）

8・9）。

SD－2は、調査区を東西に横切る形で検出したため、その長さは不明である。幅は4.1mを測る。この溝の南側斜面には、砂岩の礫が葺石状に検出され、また溝の内部から車駕之古址古墳に関連すると思われる埴輪片が1個体分以上出土した。この遺構の東側約30mの延長線上では、同志社大学によって行なわれた第1次発掘調査でも「大溝」として同様の遺構が検出され、さらに東側約50mでは、1992年度に行なわれた車駕之古址古墳第4次調査における4トレンチでも、同様の遺構が検出されている（第9・14図）。よってこの溝の総延長は、少なくとも100m以上と考えられる。この遺構の覆土は3層に分層できる。上層の1・2層はにぶい黄褐色系の粗砂及びシルト混粗砂であり、瓦器の小片が含まれる。下層の3層は暗灰黄系の粗砂混シルトで、多くの埴輪片に混ざり瓦器や土師器が少量出土している。この下層は、車駕之古址古墳の外堤北側の斜面盛り土に起因する堆積土にあたり、埴輪片を若干含む。この溝の南斜面には、拳大から人頭大の礫が葺石状に存在する。この礫群は、第1次調査で検出された大溝の礫群および第4次調査検出のSD－1と形状や方向性などが一致することから、車駕之古址古墳外堤北側裾部のプランと構造を何らかの形で反映していると考えられる（第10・14図）。



第10図　SD－2実測図

6．遺物

今回の調査で出土した遺物群は、大きく古墳時代の遺物（埴輪）および平安・鎌倉時代の遺物（中国製白磁碗、瓦器、土師器、和鏡）に大別できる。

以下、最初に古墳時代の遺物群について記述し、その後に平安・鎌倉時代の遺物群について記述を行う。

(1) 古墳時代の遺物

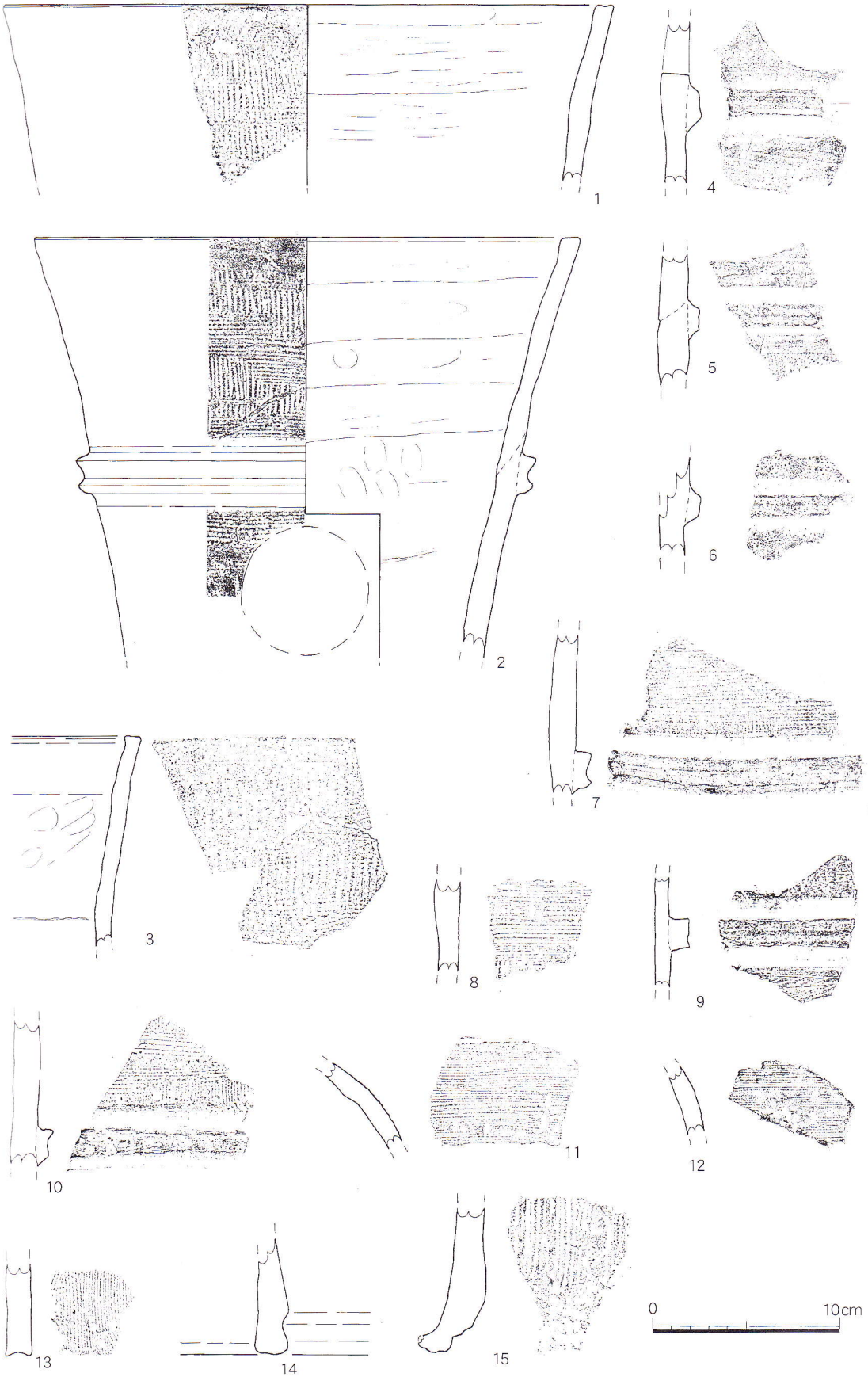
古墳時代の遺物としては、調査地が車駕之古址古墳の隣接地であるということから、SD－2を中心に埴輪片が出土している（第11図・図版10）。

1・2はSD－2出土の土師質焼成の円筒埴輪口縁部である。1は復元口径32.0cm、残存高9.5cm、2は復元口径28.8cm、残存高22.0cmを測る。共に外面調整はタテハケ後C種ヨコハケを施し、口縁端部はヨコナデされている。内面はヨコナデによる調整であり、色調は内外面ともに明黄褐色である。また、2のタガ断面形状は「M」字状を呈し、高さ0.8cmを測る。3は第3層出土の須恵質の円筒埴輪口縁部で、残存高11.1cmを測るものである。成形には右上がりのタタキを用いており、外面調整にはタテハケ後C種ヨコハケを施し、一部にナデがみられる。内面はヨコナデによる調整である。色調は外面が灰色で内面は暗灰褐色を呈する。

4～10は円筒埴輪の体部で、4～7は土師質、8は半須恵質、9・10は須恵質焼成のものである。4は第4層出土で、円形のスカシ孔を持つものである。タガの下部に左上がりのタタキがみられる。5はタガの上端面にタタキが施されている。6は磨滅が著しいが、タガの形状・胎土から2と同一個体の可能性がある。7はSD－2出土のもので外面調整にタテハケ後C種ヨコハケ、内面調整にヨコナデを施している。タガの断面形状は「M」字状で高さは0.9cmを測る。8はSK－1出土のものである。タテハケ後C種ヨコハケが施されており、褐色を呈する。9は断面台形のタガを持つもので、高さ1.0cmを測るものである。器壁には右上がりのタタキ痕が残存し、タガの上下には貼付の際のナデがみられる。色調は、灰白色である。SD－2から出土している。10の外面には、細かいタテハケ（7本/cm）の後に荒いC種ヨコハケ（4～5本/cm）が施されており、調整の段階により使用されている工具に違いがみられる。タガは断面形状が「M」字状で高さ0.6cmを測り、色調は外面が青灰色、内面は灰白色を呈する。

11・12は朝顔形埴輪の肩部である。共に焼成は半須恵質であり、外面調整はタテハケの後にC種ヨコハケが施され、一部ヨコナデが施されている。内面はヨコナデによる調整である。色調は全体的に明赤褐色を呈する。この11・12の出土位置はSD－2と第4層であるが、同一個体である可能性が考えられる。

13～15は円筒埴輪の底部である。13は第4層出土の半須恵質のもので、外面はタテハケ、内面はヨコナデにより調整されており、底面はU字状に凹んでいる。色調は明褐色を呈する。14はいわゆる「淡輪技法」を用いたものであるが、調整は不明である。SK－1から出土している。15は第3層出土の須恵質焼成の埴輪である。外面はタテハケによる調整で、工具は幅1.3cm・ハケメ単位5条のものを用いている。内面はヨコナデである。底部には明確に「淡輪技法」が認められ、底面及び屈曲部には藁状の植物の圧痕が観察できる。色調は暗灰褐色を呈する。



第11図　遺物実測図１

(2) 平安・鎌倉時代の遺物

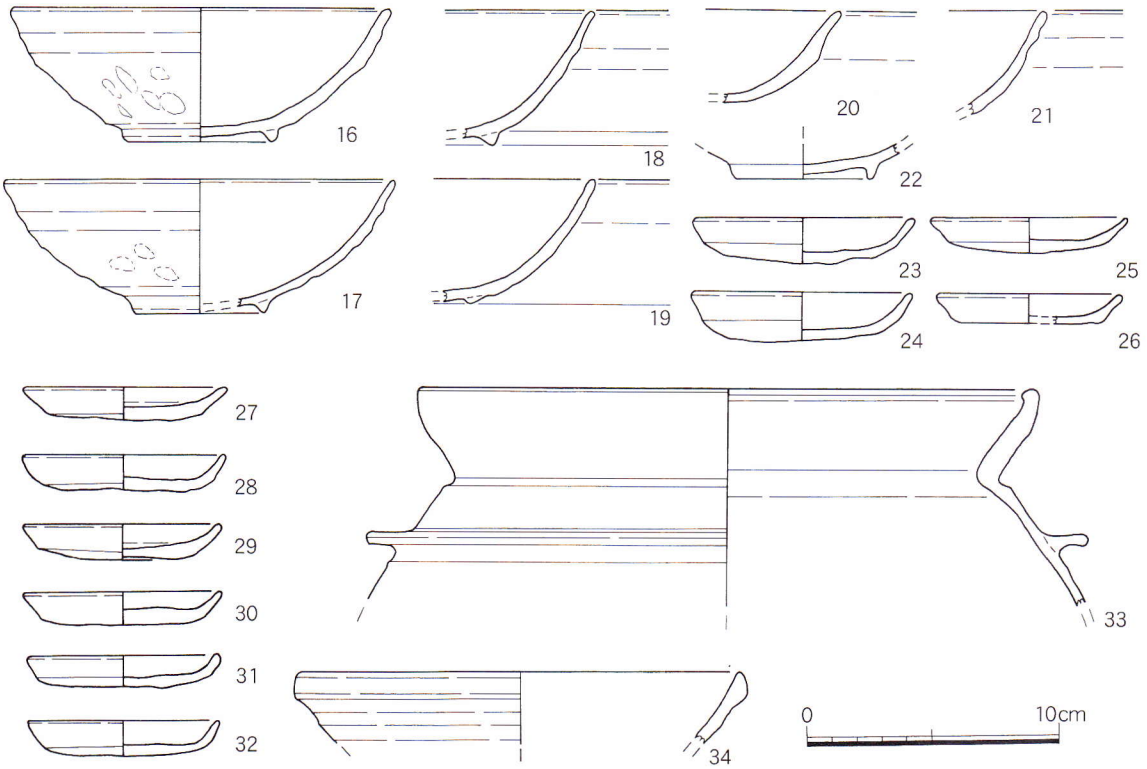
平安時代の遺物は中国製白磁碗（34）、鎌倉時代のものは瓦器椀（16～22）、瓦器皿（23～26）、土師器皿（27～32）・釜（33）・和鏡（35）などがある（第12・13図、図版11・12）。

34は中国製白磁碗で、口径17.7cm、残存高2.9cmを測り、口縁部が玉縁状のものである。

瓦器碗（16～22）は全て軟質焼成のものであり、磨滅が著しいが内面に平行線暗文がみられるものである。色調は磨滅の為、暗灰色から淡灰色に発色する。16～18、21は口縁端部外面のナデが二段になるものである。16は口径15.0cm、器高5.3cm、高台径5.7cm、17は口径15.5cm、器高5.3cm、高台径5.1cmを測る。19・20は口縁端部外面のナデが一段のものである。高台について、22は高さが5mm、16・17は4mm、18は3mm、19は2mmを測る。16はP－34、17はSD－1、19はSK－1、20～22はSK－2、17は第3層から出土した。

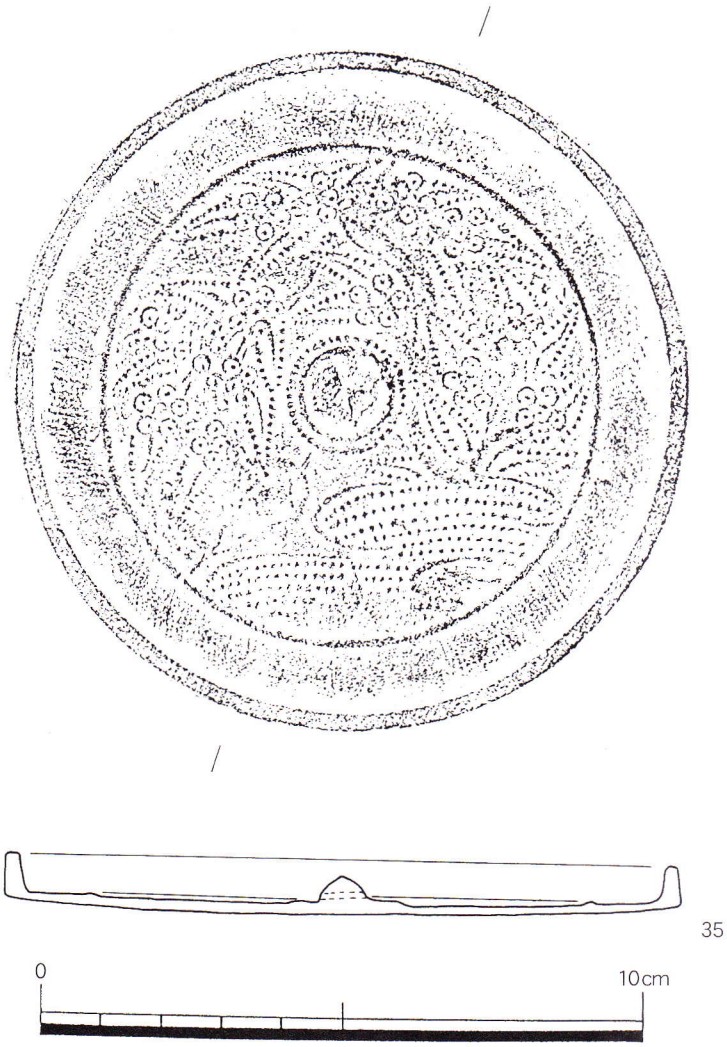
瓦器皿（23～26）についても磨滅が著しく、暗灰色から淡灰色に発色する。23は口径8.8cm、器高1.9cm、24は口径8.9cm、器高2.0cm、25は口径7.9cm、器高1.4cm、26は口径7.4cm、器高1.2cmを測るものである。23はP－34、24はP－31、26はSK－2、25は第3層から出土した。

土師器皿（27～32）はSK－3から和鏡と共伴して出土したものである。淡赤褐色から淡茶褐色に発色する。口縁部をナデにより斜め上方につまみ上げるもので、手づくね成形である。口径8.2～7.8cm、器高1.5～1.3cmを測る。33は口縁部の断面形が「く」字状となる土師器釜である。口径24.9cm、鍔径28.9cm、残存高8.7cmを測り、胎土に砂粒が多くみられる。赤茶褐色に発色するものであり、SK－1から出土した。



第12図　遺物実測図 2

35は、和鏡で、SK－2から出土した。直径11.1cm、外縁の高さ6.5mm、外縁の厚さ2.5～3.5mm、紐の高さ6mm、外区の厚さ0.5～1mm、内区の厚さは1.5mmを測り、重さは110gを測る。背面文様については外区に細かい櫛描文を施し、内区には山吹または梅と推定される花枝を配し、また花枝の下方には洲浜を描く。鳥については不鮮明であるが、洲浜の上方左側に二羽配されている。花枝の表現については山吹と考えられるが、幹の部分を非常に柔らかく表現した梅である可能性もある。以上、この鏡の型式は「洲浜花枝双鳥文鏡」で、その製作時期は13世紀後半から14世紀前半頃の鎌倉時代後期のものであると推定することができる。



第13図　出土和鏡実測図

7．出土和鏡の科学的分析

（財）元興寺文化財研究所　山田　哲也

木ノ本Ⅲ遺跡出土の和鏡の分析について以下のように報告します。

1．目的

和鏡鏡背の光沢のある緑色部分の成分を明らかにする。

2．分析箇所

和鏡鏡背の色調の異なる3カ所（写真1）

① 光沢のある緑色部分

② 白色部分

③ 褐色部分

3．使用機器及び測定条件

●エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（XRF）

（セイコー電子工業㈱製 SEA5200）

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。ナトリウムより重い元素が検出可能である。

モリブデン管球使用、大気条件下、管電圧50kV

●フーリエ変換型赤外分光光度計（FT－IR）（日本電子㈱製　JIR－6000）

赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

KBr錠剤法（試料をKBr（臭化カリウム）と混合、圧縮し錠剤を作製して行う分析法）、分解能4cm^{-1}、検出器　TGS

●実体顕微鏡（㈱オリンパス製SZH－IILD）

4．分析手順

和鏡の表面の①～③をXRFにより非破壊で元素分析し、ついで①の部分から少量の試料を採取しFT－IRにより構造を調べた。

5．分析結果

XRFによる元素分析の結果、①の緑色部分からは主として銅(Cu)を、②・③の部分からはCu、スズ(Sn)、鉛(Pb)および鉄(Fe)を検出した(図1－①～③)。

つぎに①の部位から採取した試料(写真２)をFT－IRで分析したところ、塩基性炭酸銅($CuCO_3 \cdot Cu(OH)_2$マカライト)の吸収が得られた(図2)

6．考察

③の部分は、その色調から和鏡の地金に近い部分とみられる。検出元素から判断して、和鏡は青銅製である。①の部分は銅が選択的に腐食し、塩基性炭酸銅の緑色を呈しているものと考えられる。

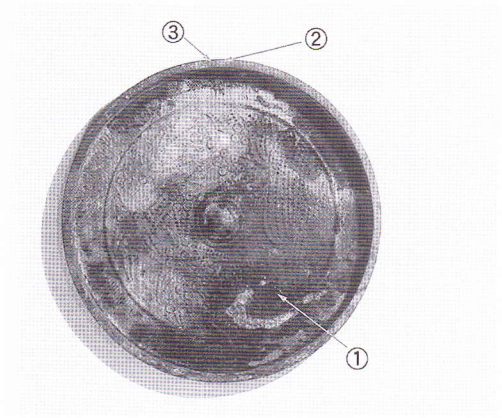


写真1　和鏡の分析箇所

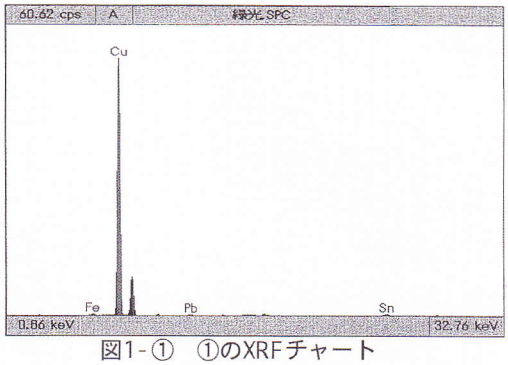


図1-①　①のXRFチャート

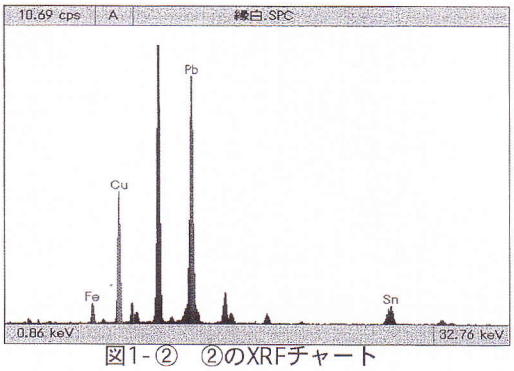


図1-②　②のXRFチャート

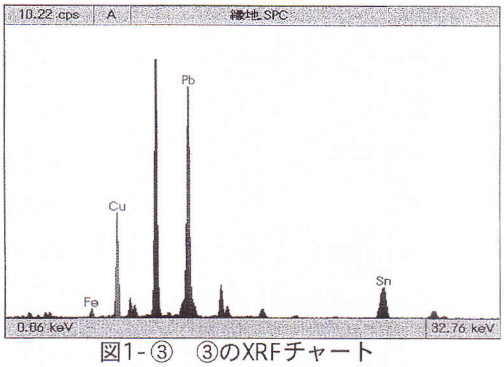


図1-③　③のXRFチャート

写真2　①の部位から採取した試料（×30）

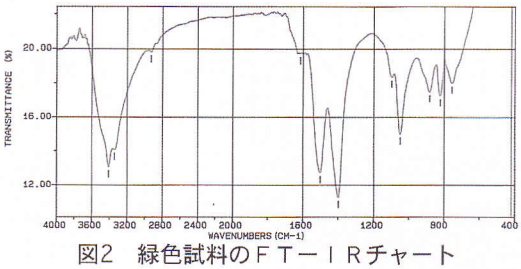


図2　緑色試料のＦＴ－ＩＲチャート

8．まとめ

今回の調査で得られた成果について、以下に遺構と遺物とにわけて簡単にまとめておく。

今回の調査で検出した遺構については、特に6枚の土師器皿および和鏡が一括出土した土坑（SK－2）および車駕之古址古墳の外堤外側に巡らされた外周溝に関連する可能性のある溝（SD－2）が注目される。

まずSK－2であるが、この土坑はその規模や土師器皿および和鏡を出土したことなどから、土壙墓である可能性が考えられる。この遺構の時期は、出土和鏡の形式や、同一遺構面のピット（P－31・34）内から出土した瓦器などの型式から、概ね13世紀の第4四半期から14世紀の第1四半期頃と考えられる。すなわち西暦1275年以降で1325年頃までの鎌倉時代後期の約50年間に形成された遺構ということができる。

この遺構に関する歴史的景観を復元する際に参考となる資料としては、今回の調査地点より南へ約200mの地点で1992年に実施された第7次調査の成果があげられる。この調査では中世の石垣、溝、礎石などが検出された。また遺物としても、瓦質の羽釜、備前焼甕・すり鉢、青磁の碗・皿のほかに、瓦当面に梵字をあしらった軒丸瓦なども出土しており、中世寺院の存在が想定されている。

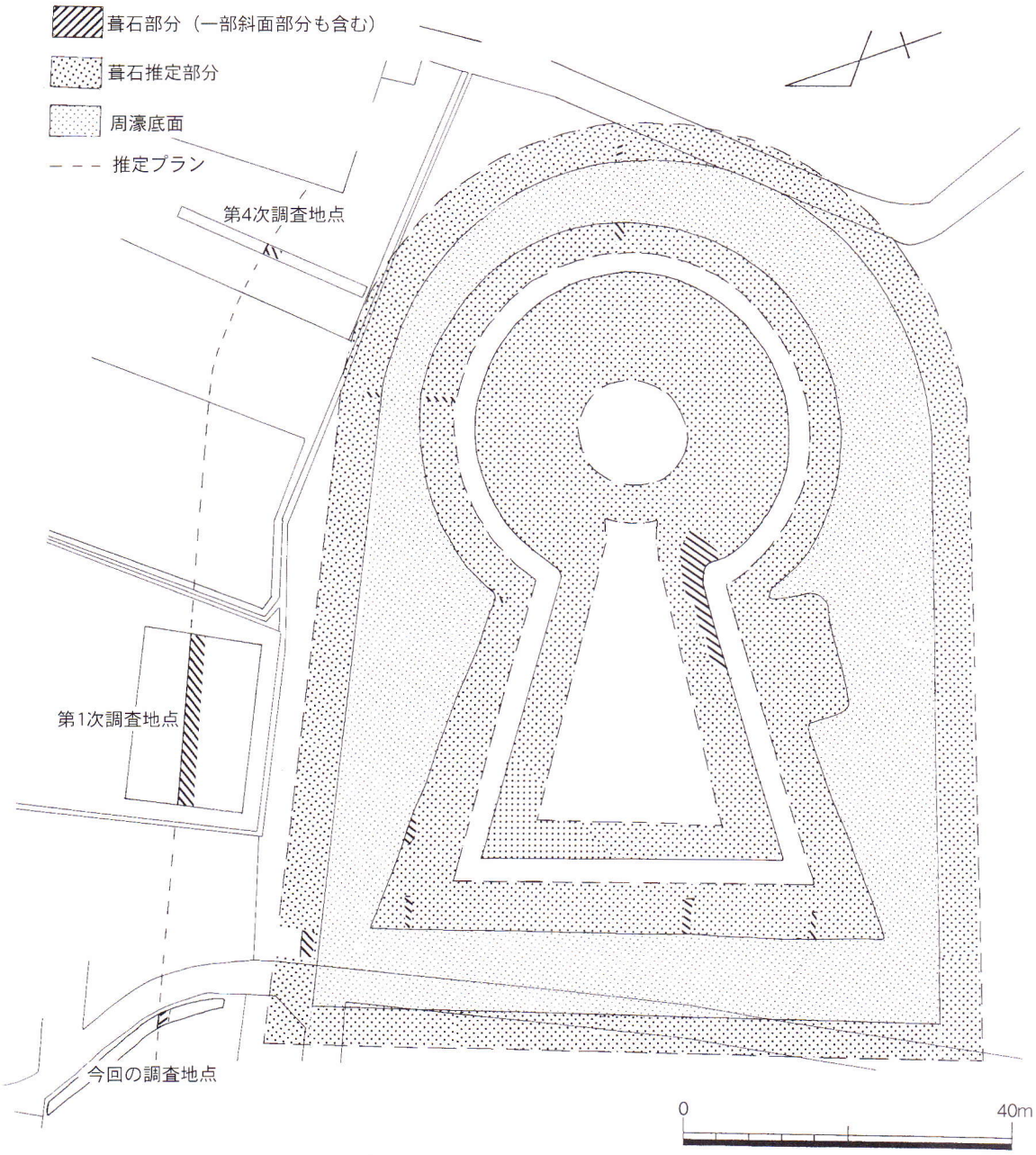
さらに付近には過去の採集遺物等から木ノ本経塚の存在も推定されており、古代末から中世にかけては、寺院・経塚・墓域の存在といった歴史的景観を、今回の調査地点付近に想定することができる。

また、SD－2に関しては、第1次調査および第4次調査時においてもその延長部分の存在が確認されており、今回の調査成果と合わせて、車駕之古址古墳北側の外堤外側部分を推定復元することが可能となった（第14図）。

この溝は南側斜面（すなわち車駕之古址古墳側の斜面）にのみ葺石状施設が存在し、また遺構の覆土内からは車駕之古址古墳の外堤上に樹立されていたであろう円筒埴輪が倒壊した状況で検出されている事などから、本来的には古墳の外堤に関連する施設と考えることもできる。しかし同じ遺構覆土内には瓦器片も包含されており、同様の溝が中世期の所産と判断された第4次調査の成果を考慮するならこの遺構が機能し完全に埋没したのは瓦器が存在する時代、つまり鎌倉時代のことと考えられる。ただし葺石状施設を有し、埴輪片を比較的多く包含する点よりみて、3ヶ所で検出された溝は外堤外側裾部の位置を反映している可能性を指摘できる。

次に出土遺物に関して、埴輪では円筒埴輪や朝顔形埴輪が出土している。全体的に無黒斑で外面調整にタテハケ後C種ヨコハケ、内面調整にヨコナデを用いるものが主流を占めており、底部には「淡輪技法」が認められるものが多い。また体部及びタガ上面にタタキ痕を残すものもみられ、成形段階と調整段階それぞれにタタキを用いていることがわかる。なお外面調整にみられるハケ状工具痕はその条線密度から4～5本/cmと7本/cmの2種類に大別することができる。少数ではあるが10のように、1次調整と2次調整で異なる工具を用いる例もあり、埴輪の製作工程を推定する上で注目される。

以上の特徴から、本資料は川西宏幸氏のⅣ期に並行するものであり、車駕之古址古墳出土の埴輪と基本的に共通するものであり、本来は外堤部分に樹立されていたものと判断される。



第14図　車駕之古址古墳復元図（既刊の概報からトレースして作成）

また、平安から鎌倉時代の出土遺物に関しては、その多くが日常生活に用いられたと考えられるものである。しかし中国製の白磁碗及び和鏡は、当時庶民の持ちえたものではないことから、中世寺院もしくは在地の有力者を中心とした集落域であったという歴史的景観を出土遺物から見ても推定することができる。

【参考文献】
川西宏幸　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－2　1978年
『木ノ本釜山（木ノ本Ⅲ）遺跡発掘調査報告書』同志社大学考古学研究室・和歌山市教育委員会　1989年
『車駕之古址古墳範囲確認調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1994年

報告書抄録

ふりがな	きのもとさんいせきだい9じはっくつちょうさがいほう
書名	木ノ本Ⅲ遺跡第9次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	木建　正宏・北野　隆亮・髙橋　方紀
編集機関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640－8227　和歌山県和歌山市西汀丁29　TEL.0734－35－1195
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
木ノ本Ⅲ 遺跡	和歌山県 和歌山市 木ノ本	3020150	42	34° 15′ 45″	135° 8′ 13″	19971031 19971202	60	市道拡幅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木ノ本Ⅲ 遺跡	集落	古墳時代 鎌倉時代 江戸時代	溝・土坑 ・ピット	埴輪・土師器 須恵器・瓦器 和鏡・中国製白磁碗	車駕之古址古墳の外堤に関連する溝（SD－2）。鎌倉時代の和鏡を出土した土坑（SK－2）

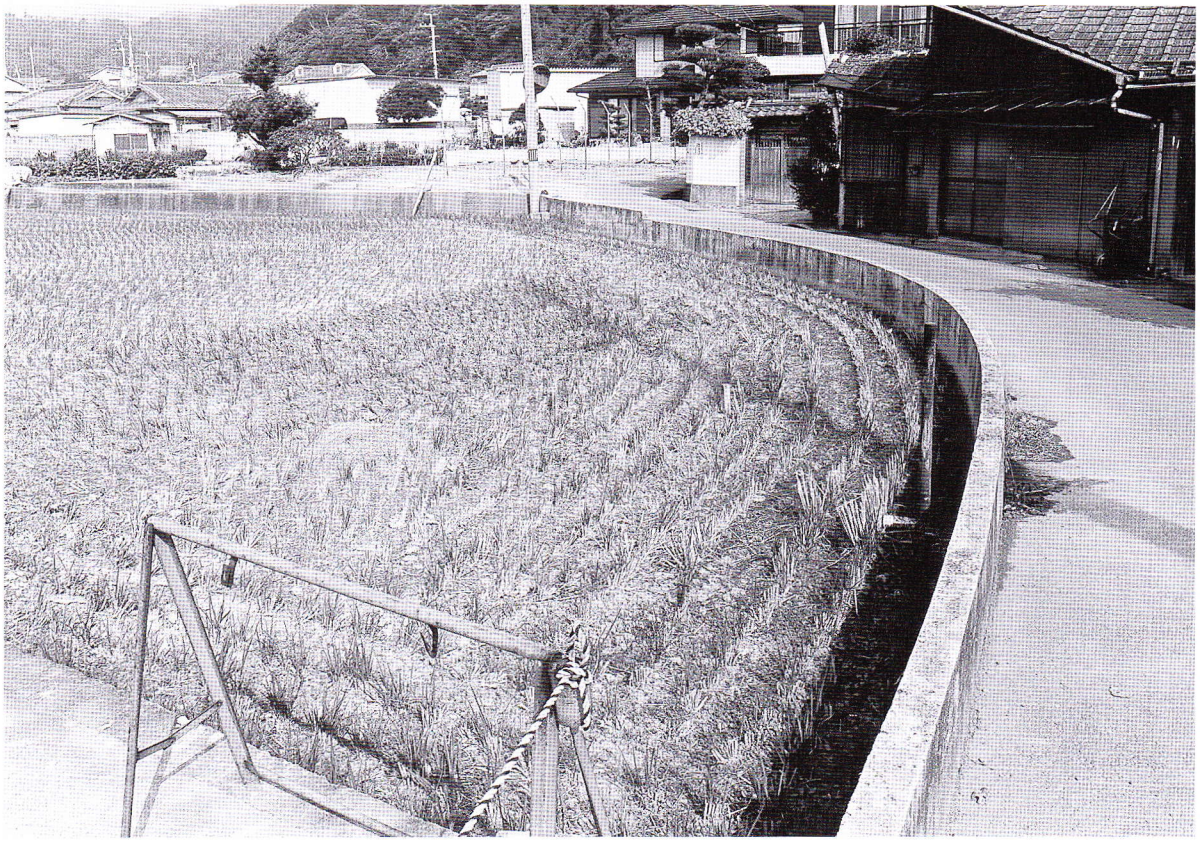
図　　版

図版1

調査地および車駕之古址古墳（南から）

図版2

調査地遠景（南から）

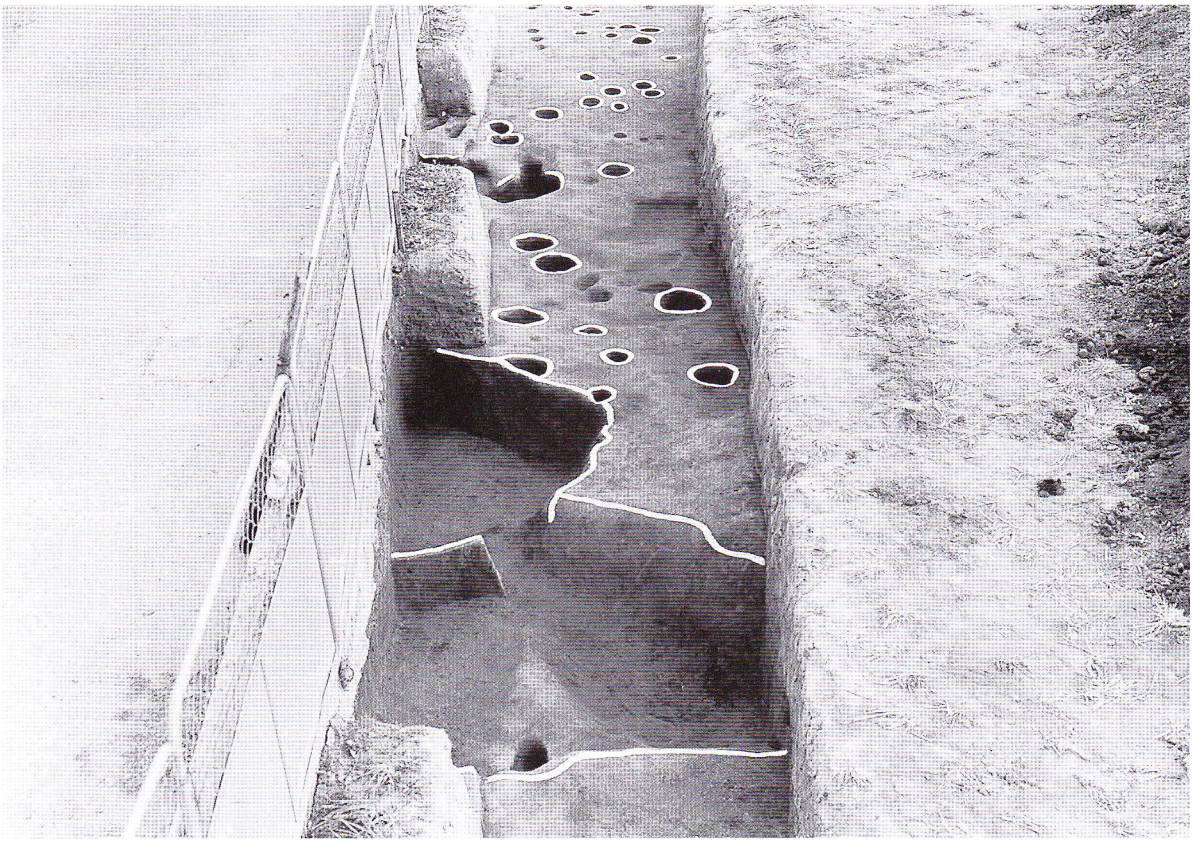


調査前状況（南から）

調査地北端部土層堆積状況（西から）

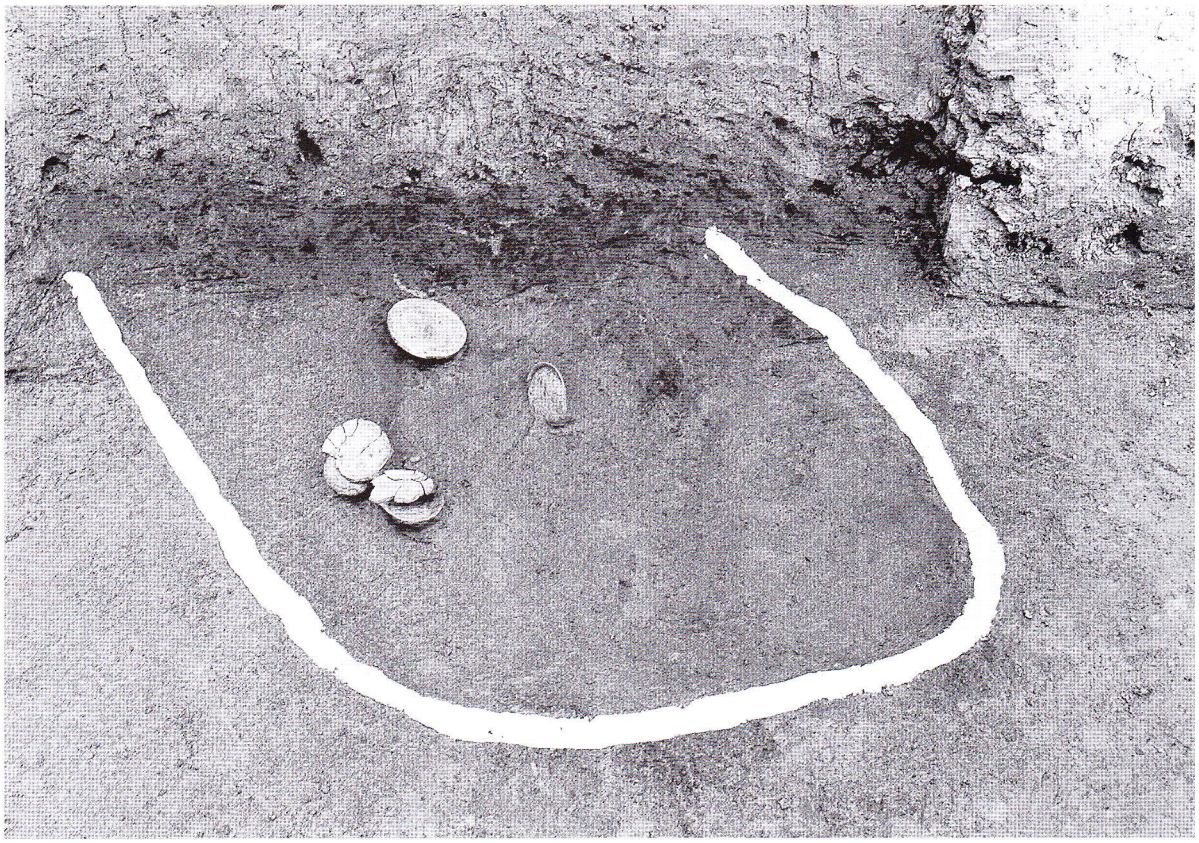
調査地南端部土層堆積状況（西から）

図版4

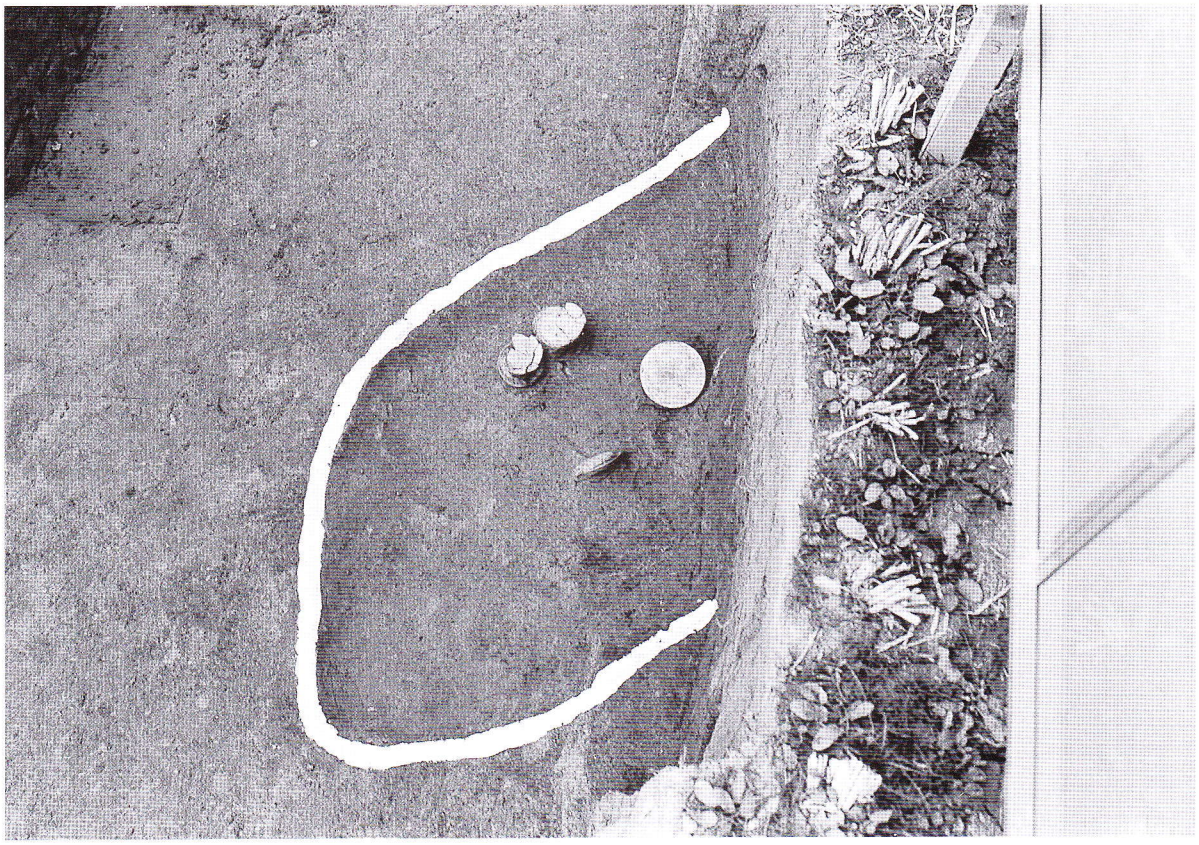


第１遺構面完掘状況（北から）

第１遺構面完掘状況（南から）



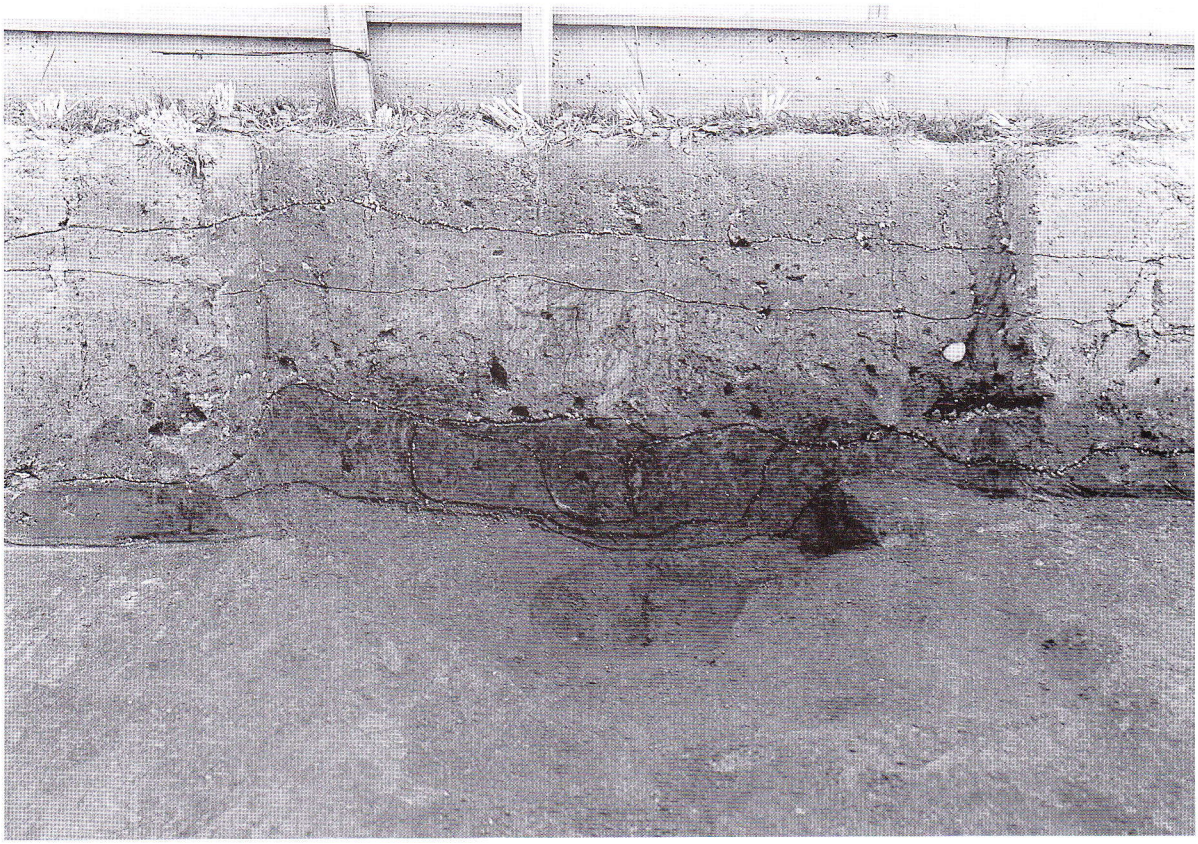
SK－2完掘状況（西から）



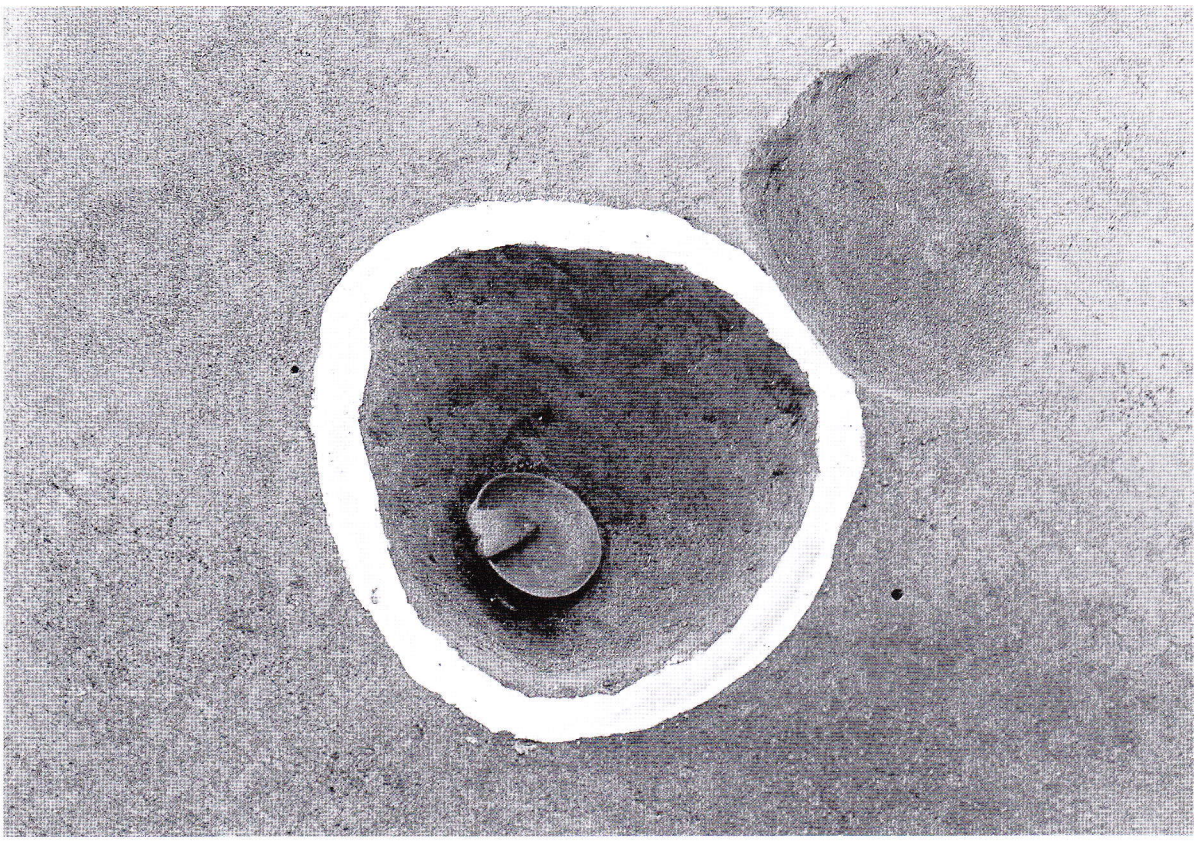
SK－2完掘状況（南から）

図版6

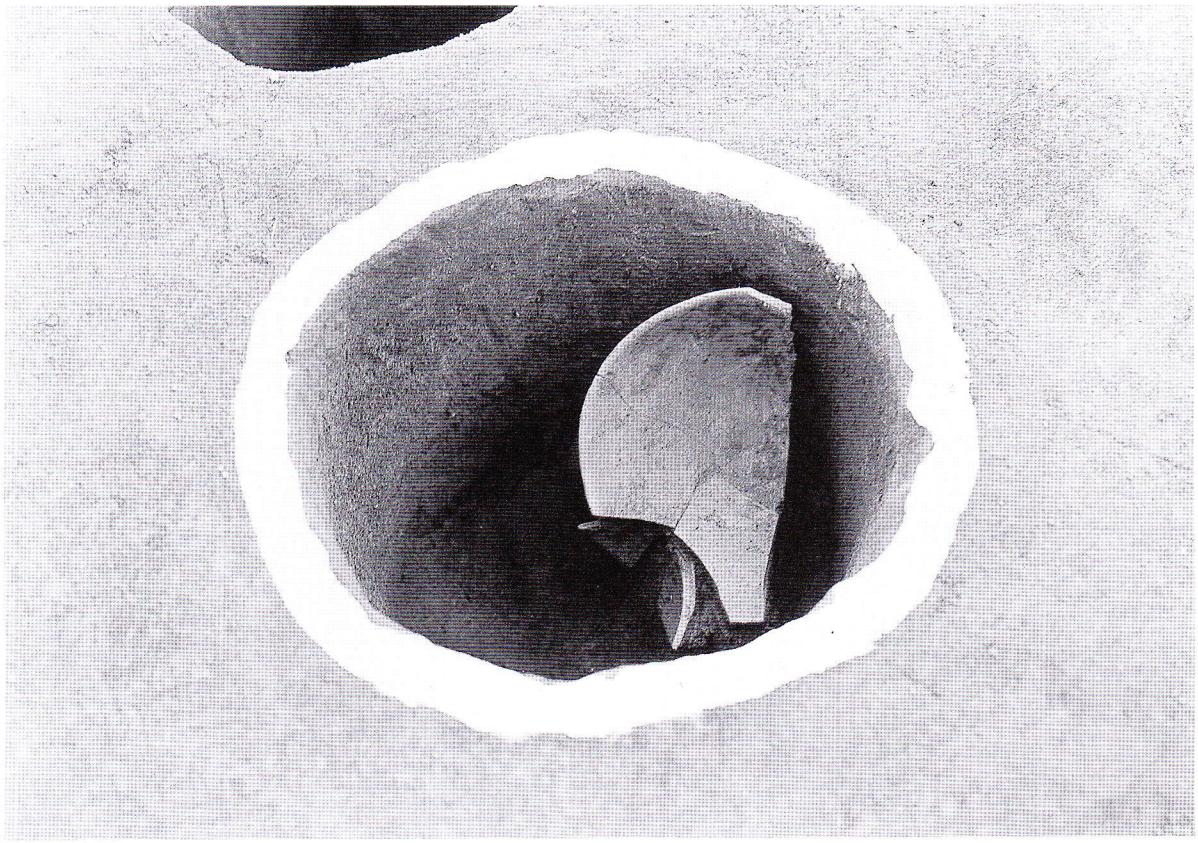
SK－2土師器皿および和鏡出土状況（南から）



SK－2土層堆積状況（西から）

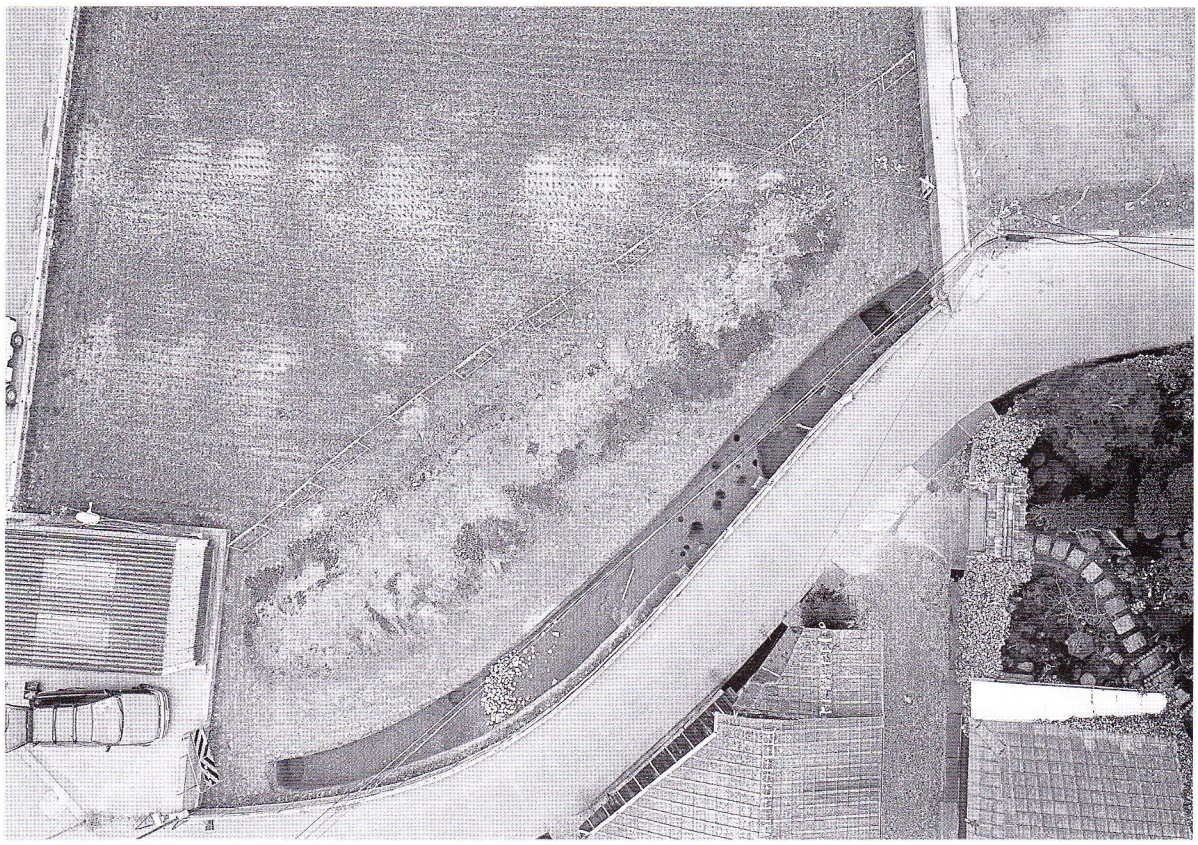


P－31瓦器皿出土状況（西から）

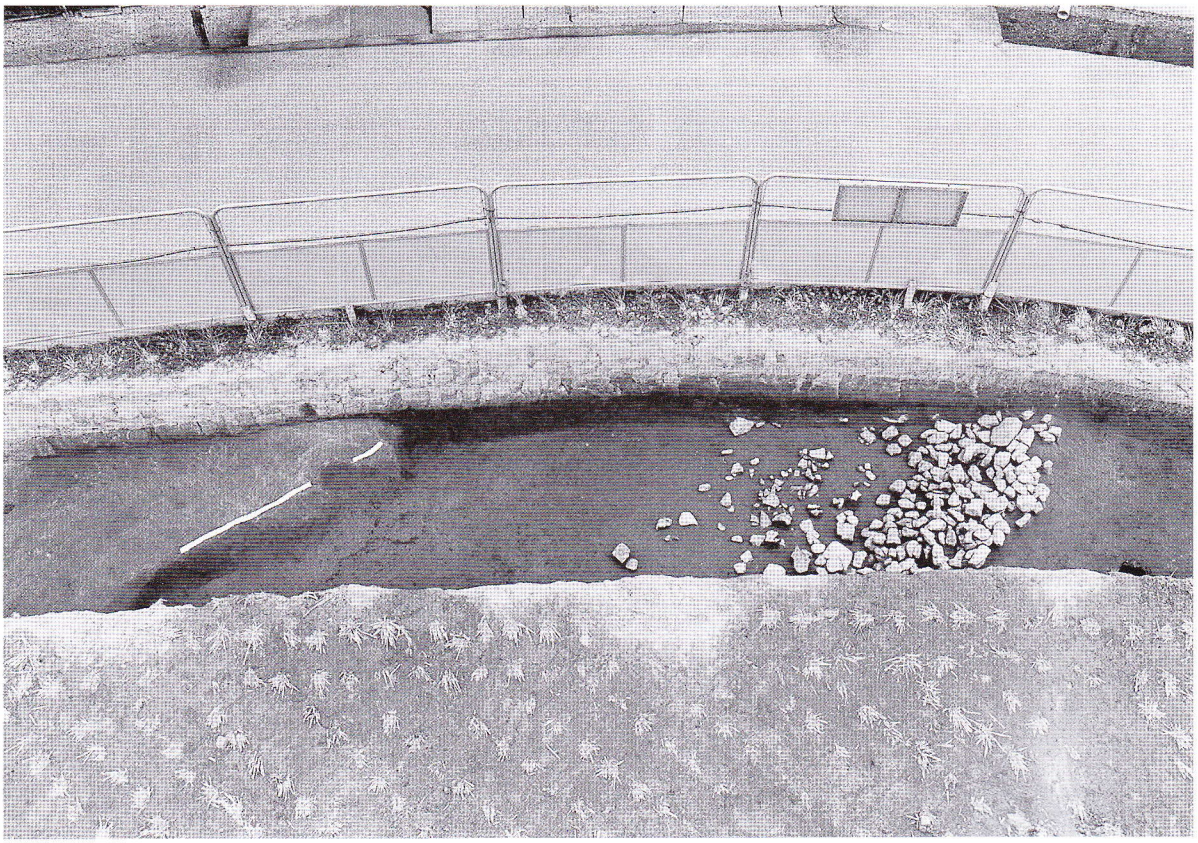


P－34瓦器椀出土状況（西から）

図版8



第2遺構面完掘状況（右が北）

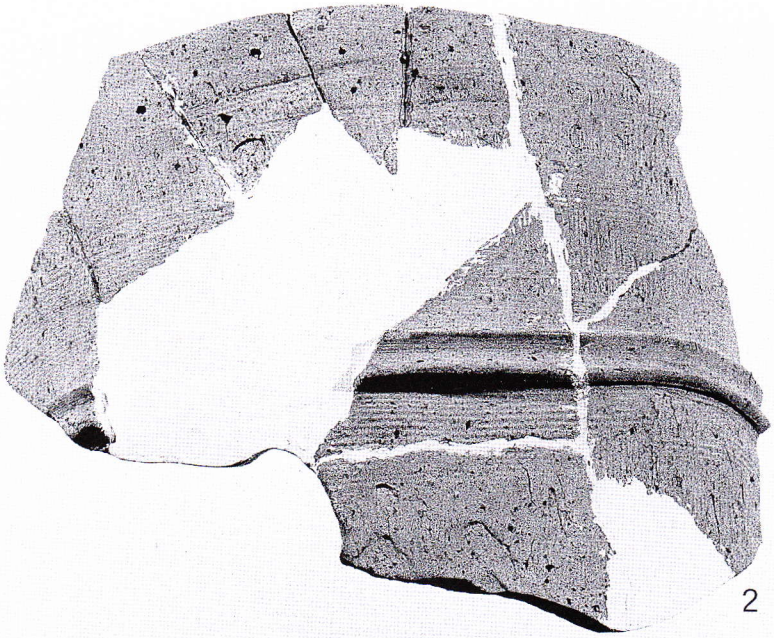


SD－2完掘状況（西から）

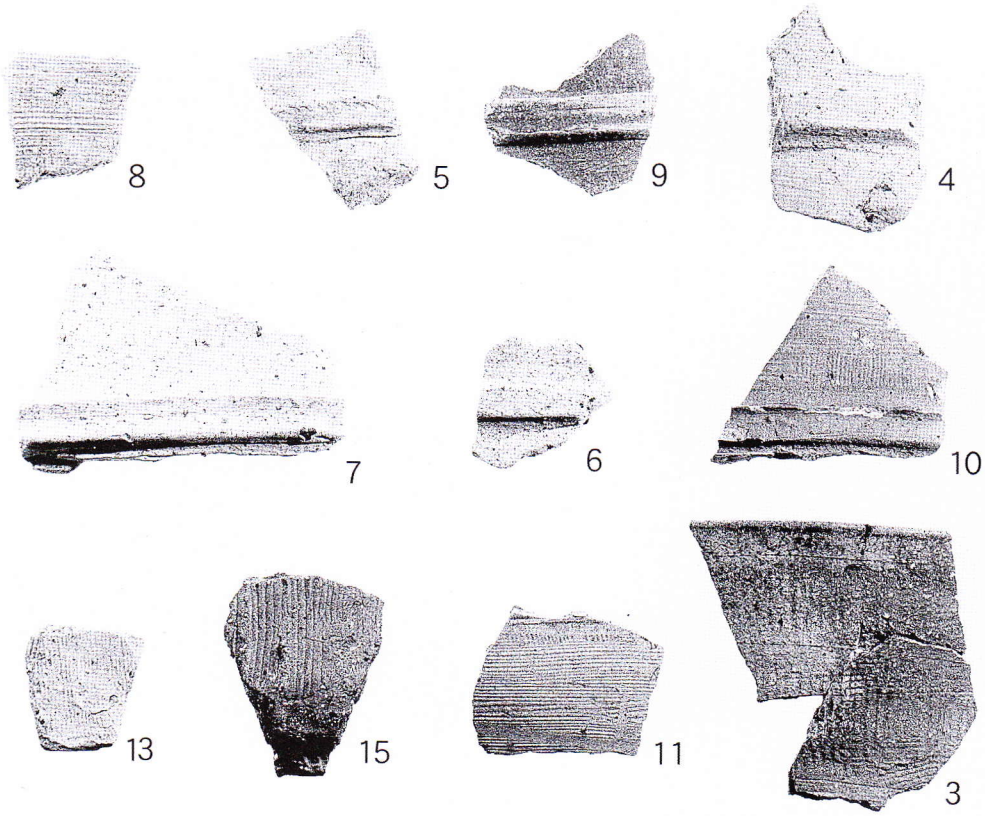
SD－２内葺石検出状況（東から）

SD－２内埴輪検出状況（東から）

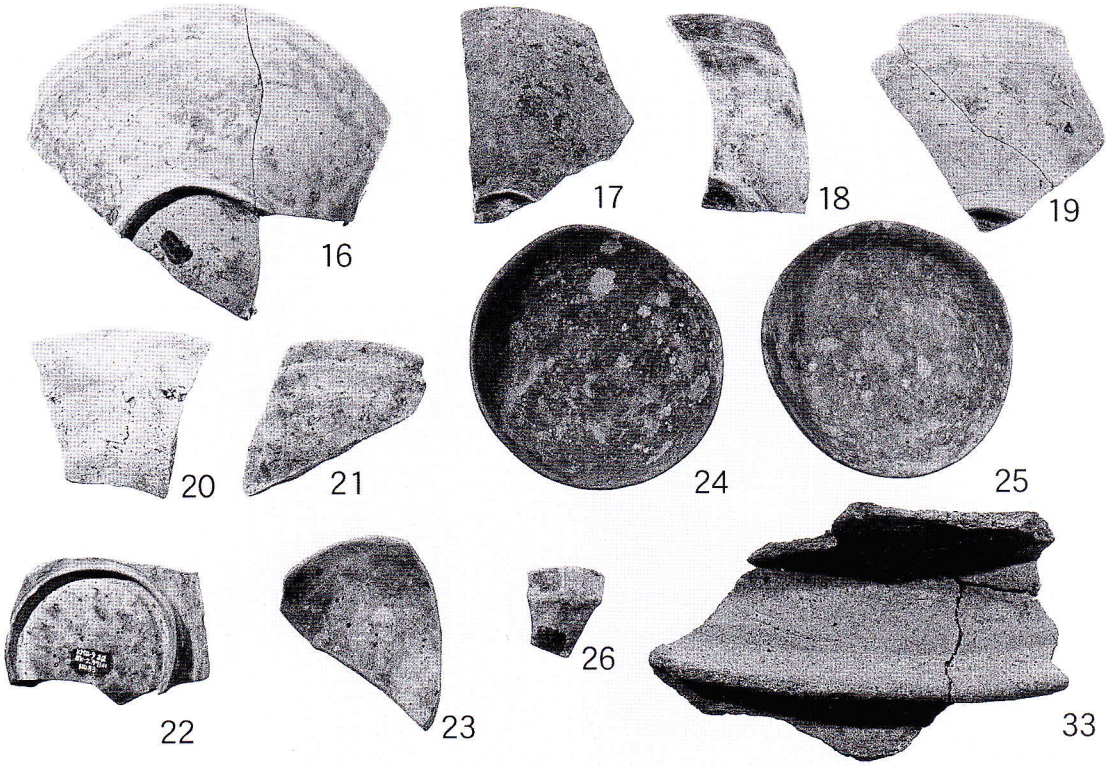
図版10



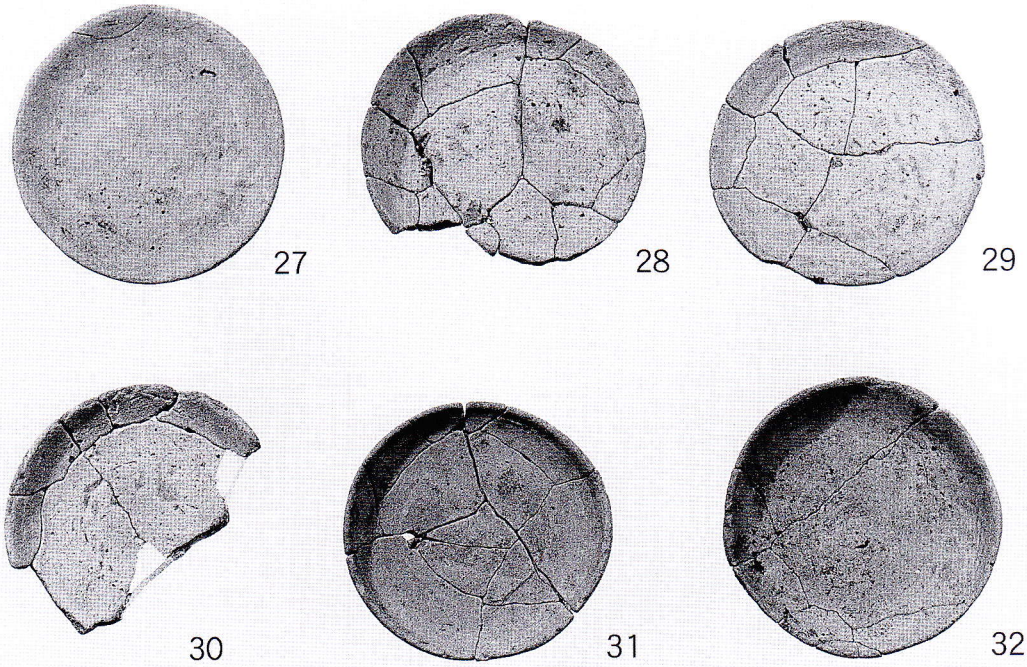
円筒埴輪（口縁部）



円筒埴輪 朝顔形埴輪

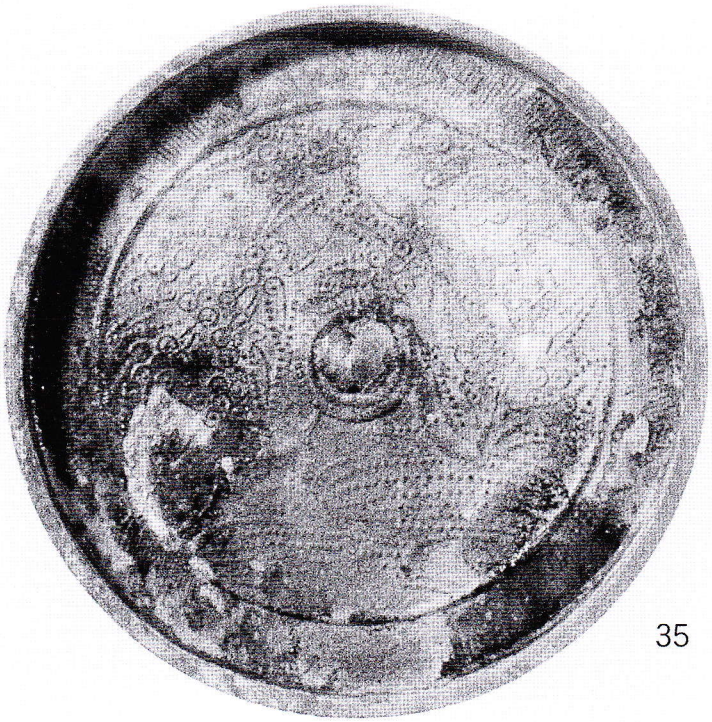


土師器 瓦器



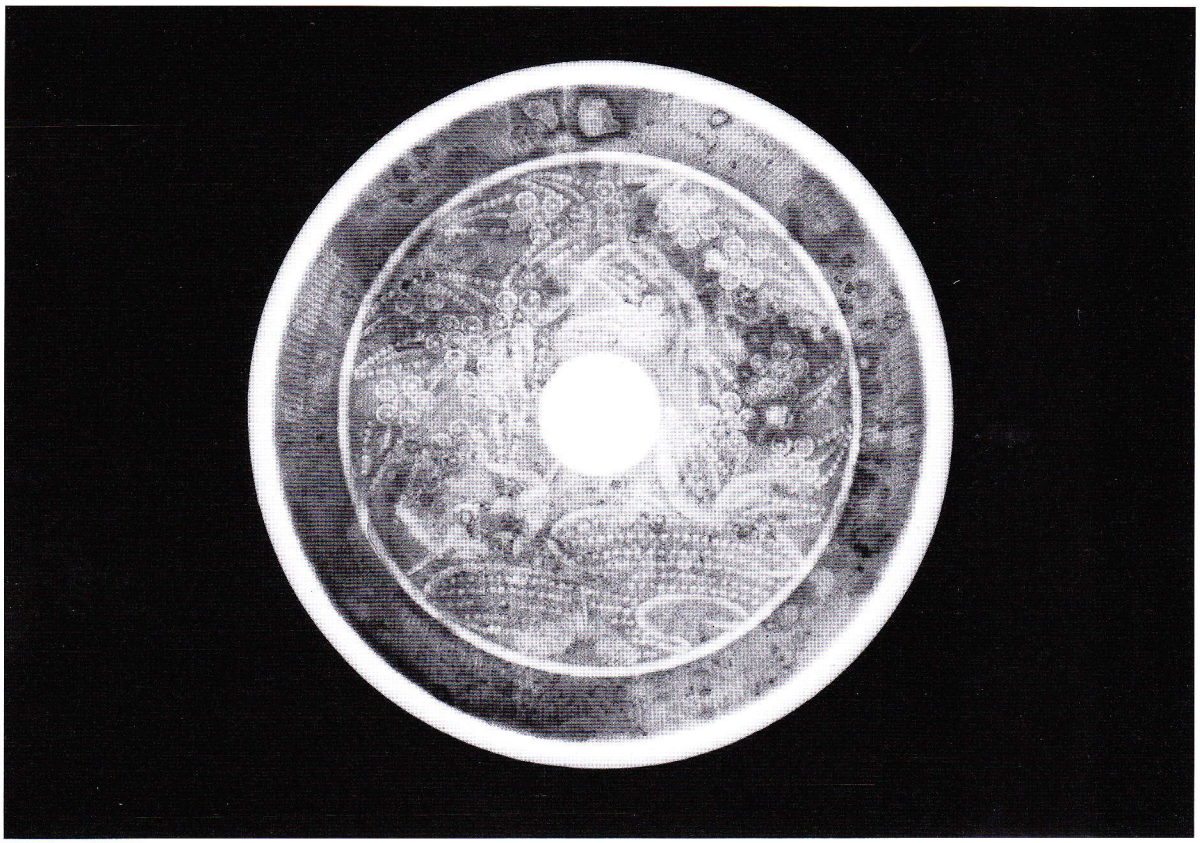
SK－2出土土師器皿

図版12



35

SK－2出土和鏡（洲浜花枝双鳥文鏡）



和鏡X線写真

平成10年3月31日発行

木ノ本Ⅲ遺跡 第9次発掘調査概報

編集・発行　(財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　株式会社和歌山印刷所

© (財)和歌山市文化体育振興事業団 1998